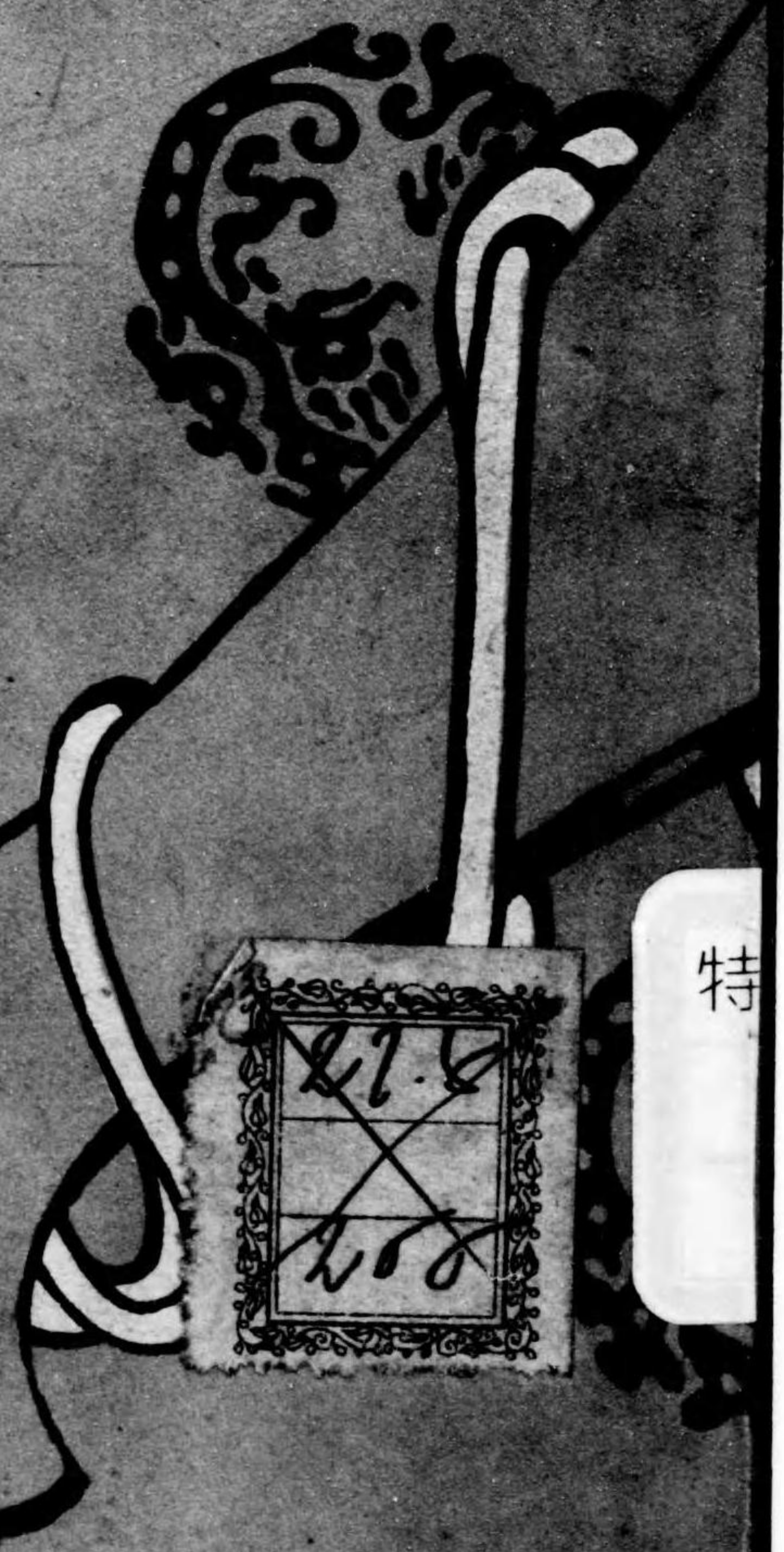




筑前琵琶歌集

橘旭翁

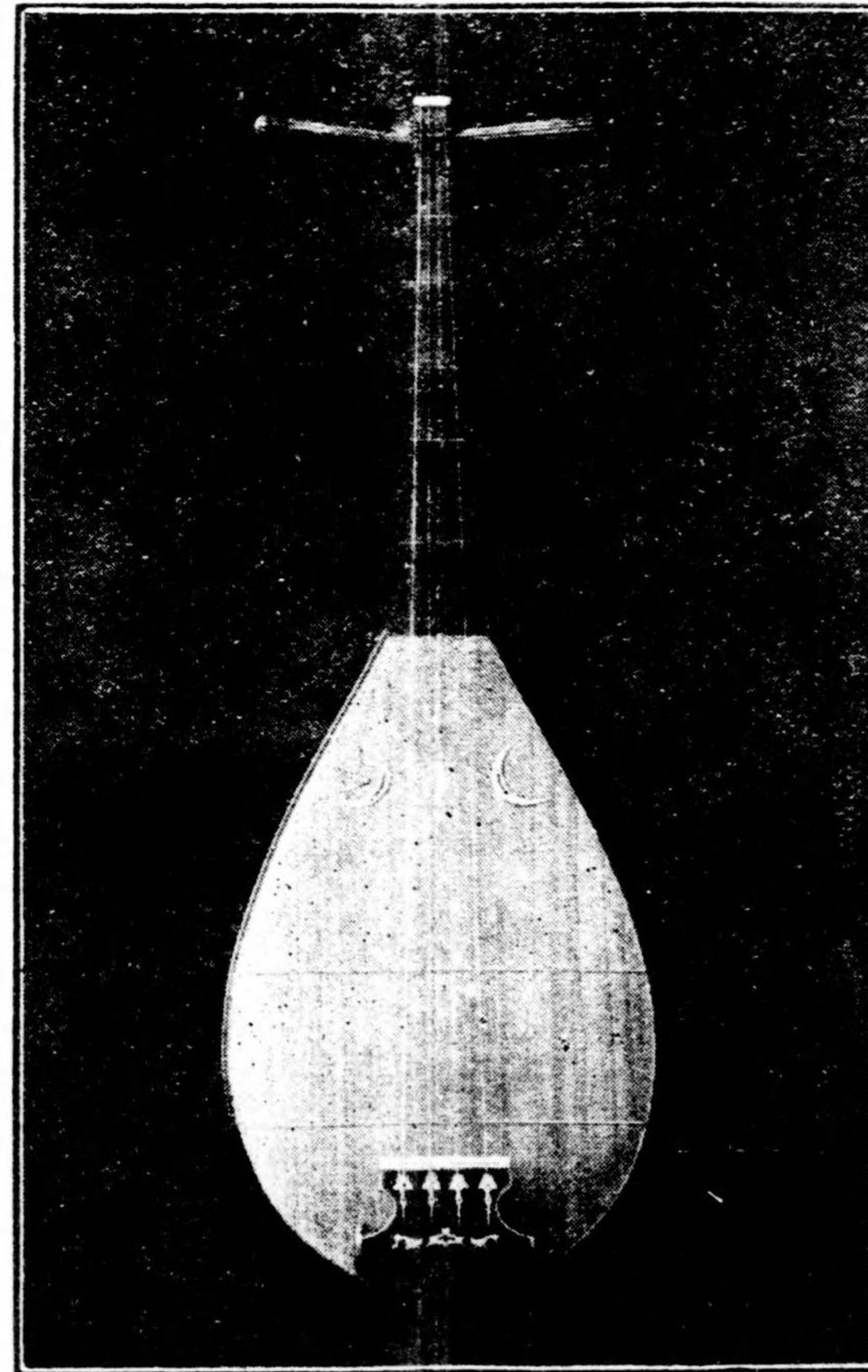


特



始





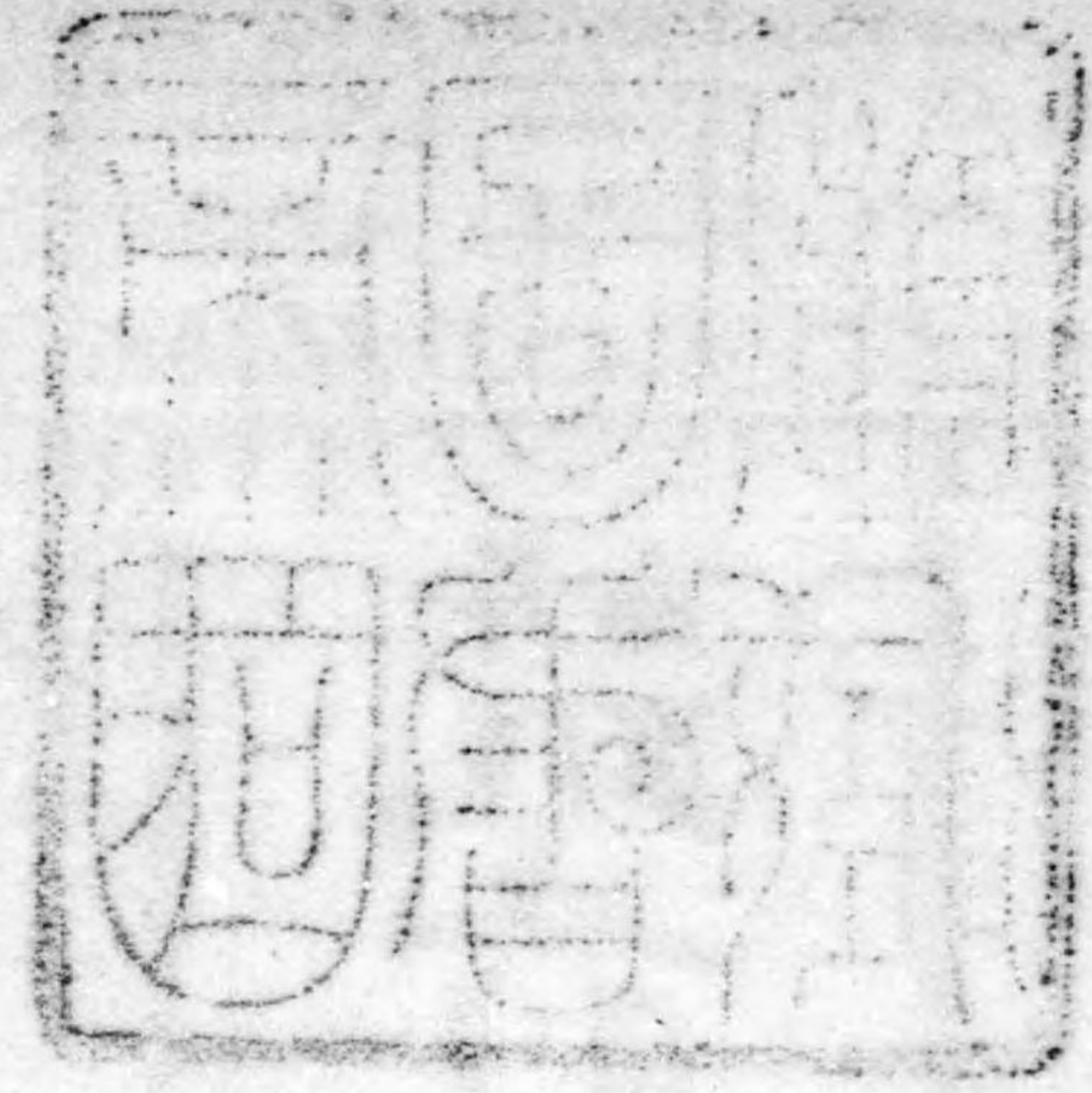
持100  
112

橘旭翁師作譜

筑前琵琶歌集

東京 川越書店

天正  
4. 5. 26  
内交



自序

筑前琵琶歌と稱する袖珍本は一二種あるけれども真面目なものでないことは内容を一見した者の誰しも首肯するところであらう。今度余が編纂せるは橘家の承諾を経たもので、その歌曲は、世に知られたる妙曲のみを採擇したのであるから、彼等射利を事として世を欺きつゝあるものと同視せられては甚だ迷惑である。

大正乙卯元旦

編者しるす

曲譜説明

一、二、三、四、五、六、七、甲、乙 音調

合……………合の手

春……………春節

夏……………夏節

秋……………秋節

冬……………冬節

目 次

一 項	羽	.....	一
一 扇	の 的	.....	七
一 小	督(上段)	.....	一四
一 同	(下段)	.....	一九
一 靜	御 前(上段)	.....	二三
一 同	(下段)	.....	二九
一 靈	馬 漣	.....	三四

旭	.....	旭 節
雲	.....	雲 節
露	.....	露 節
月	.....	月 節
山越	.....	山越節
大落	.....	大落し
小落	.....	小落し

( 8 ) 目 次

目 次 終

一 太田道灌……………九六

一 川 中 島……………一〇二

一 乃 木 將 軍……………一〇九

一 玉 藻 の 前……………一一五

一 千 手 の 前……………一二三

一 源 三 位……………一二七

一 龍 の 口……………一三六

目 次 ( 2 )

一 四 條 畷……………四〇

一 宇 治 川(上段)……………四七

一 同 (下段)……………五三

一 湖 水 渡……………五七

一 義 士 の 本 懐……………六四

一 橋 中 佐……………七二

一 大 高 源 吾……………七九

一 夜 の 鶴……………八五

一 松 の 廊 下……………九二

# 筑前琵琶歌集

項羽 開項羽

- ( 1 )
- 羽 扱も兵を會稽に起してより
  - 雄名天下に轟きつる
  - 時なるかな戦ひ敗れ
  - 向ふ處勁敵なく
  - 流石の英雄楚の項羽も
  - 残兵八千を磨き



( 2 )

項

三 垓下がいかにこそは退しりぞきけれ々

六 時ときしも頃ころは秋あきの末すま

五 殘日ざんじつすてに西陵せいりやうに沈しづみ

四 霜月さうげつ高く東山とうざんに上のぼれば

三 萬籟ばんさい聲こゑををさめ

四 四隣しりん寂寥せきれう遠征えんせいの將士しやうし

三 うたゝ涙なみだを催もよほせり々

七 折をりもこそあれ垓上がいじやうより

羽

六 如何いかなる人ひとの遊戯すまひにか

四 歌うたに和わし洞簫どうせうを吹ふきければ

四 其響そのひびき最も悲痛ひつづにして

四 餘韻よゐん嫋々いとすさ縷いとの如ごとく々

三 八千の楚兵そへい俄にはかに故山こざんを憶おもひ

四 互たがひに促うながし落ちおさりて

三 残り少すくなくなりにけり々

四 去さる程ほどに四面楚歌しめんそかの聲こゑを聞きき

三 項羽かううは天てんを仰あふいで長嘆ちやうたんし々

五 嗚呼あゝ皇天くわうてん我われを亡ほろぼすかと

四 豪勇無雙かうゆうむさうの英傑えいけつも

四 慷慨胸かうがいむねに押おしせまり

三 打装うちしなれてぞ見みえければ

三 虞美人ぐびじん其膝そのひざによりすがり々

七 多年君たねんきみに従したがひ侍はべりて

六 幾多いくたの艱難かんなんに出逢であしも

五 涙なみだ一滴てきごほ添みさぬ身みも

六 今日は如何いかなる事ことならん々

三 落ちくる泪なみだせきあへずと

四 初音はつねを漏もらすはとゞぎす

聞きくに哀あはれぞ増まりける々

四 聽やがて項羽かううは敵陣てきぢんを指さし示しめし々

四 見みらるゝ如ごとき數萬すまんの敵軍てきぐん

五 十重とへ廿重はたへにもとりまけば

四 逃のがるゝ術すべもなよ竹たけの

四 かよわき御身おんみをつれ難がたし々

三 とはいへ俄にはかに別わかれんこと

三 堪たへぬ辛つらさの心こゝろのうち

( 8 )

羽

項

冬 察し給へと勇將の

目にも時雨のひとしきり

降もかゝらん許りなり

四 虞美人纔に面をあげ

七 假令野の末山の奥

六 何地如何なる處とも

四 君の在さん限りには

三 我も御供仕らん

五 是非とも召連絡ひねと

六 言はれて胸におきあまる

夏 深き情を盃に

うけて項羽は立上り

チカラヤマチスキキハヨチオホフ  
力拔山兮氣蓋世

トキコリアラズ スキユカズ  
時不利兮離不逝

スキノユカザル イカンスベキ  
離不逝兮可奈何

グヤグヤ ナンヂチイカンセン  
虞兮虞兮奈若何

七 虞美人亦之に和し

六 俱に歌ひ俱に泣き

五 殘燭愈々くらく

六 音調愈々濕ふ

四 折しも聞ゆる金鼓の響き

四 ぎや敵軍よせぬ間に

五 我は一方きりひらかん

六 汝は是より如何にもして

五 命を全らし給へかし

四 我亦不思議に運命ひらけなば

三 再相見る事あらんと

五 思ひ入りたる言の葉に

四 虞美人今はと諦めつ

三 御名残はつきねども

六 首尾よく御開き給はるべし

四 さるにても此儘此所に残らんは

三 いとも愚の業なれば

五 假に男の姿に替へ

四 遁れぬ迄も落ちてみん

四 あはれ御佩刀をかし給へと

項

羽

( 5 )

(6)

項

羽

⑤ 請はれて餘儀なく佩劍を

⑥ 忽ちひらめく劍の光

⑦ ドウと許りに伏し給ふ

⑧ 抱きかゝふる膝の上に

夏  
花の顔色あせて

⑨ 美しき程一入に

⑩ 虞美人項羽の手をとりて

⑪ いとも畏く候へば

⑫ 魂魄君のかけに添ひ

⑬ さらにと解きて授ければ

⑭ 虞美人自から喉をつき

⑮ こはそも何たる生害ぞと

⑯ サツと迸る血汐の雨

⑰ 丈の黒髪ふり亂れ

⑱ もの凄くこそ見えにけれ

⑲ 徒らに御心を煩はさんこと

⑳ 甲斐なき命をこゝに捨て

㉑ 行末長く守るべし

池

はやこれまでと云ふ聲も

ともに絶入りうせにけり

㉒ 次第に間近く聞ゆれば

㉓ 美人の屍に禮拜し

㉔ かこみをつきて墓地

千草にすなく蟲の音と

㉕ 此時またも金鼓のひびき

㉖ 項羽は馬にうち乗りて

㉗ 残る勇士を従へて

㉘ 江東さしてぞ落ちにける

開扇の的

(7) 扇の的

㉙ 壽永の春の屋島瀉

㉚ 十八日の日は更けて

㉛ 波風荒き如月や

㉜ 潮に響きし矢叫も

- ④ 木魂になりし太刀音も
- ④ やがてぞ絶ゆる敵味方々
- ⑥ 沖に連なる兵船は
- ⑤ 揚羽の蝶に紅の
- ④ 旗ひるがへす平家方々
- ④ 長汀曲浦の陸地には
- ④ 九郎判官義経を
- ④ 大将とする東猛者
- ⑦ 笹りんだうを素練に
- ⑥ 染めたる旗の幾流れ
- ④ 浦風牙えて吹き靡く々
- ④ 折もこそあれしづくと
- ④ 渚の方へ漕ぎよする
- ④ 平家の船の只一艘々
- ④ 舳にかゝげし軍扇は
- ⑤ 旭かたどる金の丸
- ④ 見るも眩ゆき風情なり々
- ④ 陸にひかへし東軍は

- ④ 大将はじめいぶかしみ
- ③ とも何事かなすらんと々
- ⑥ 船に眼を打そゝげば
- ④ 花の顔月の眉
- いともめてたき上臈の
- ③ 檜扇サツと打ひるげ
- ⑥ これ射よがしに磨く々
- ③ 義経片頬に笑み給ひ
- ④ 都の人のならひとて
- ④ さしもやさしき望みかな
- ③ 味方の手錬たれならん
- ③ とく射落せと下知のもと
- ③ 數多の人に押されつ々
- ④ 罷出たる若武者の
- ④ 年は廿歳をよも越えじ々
- ⑦ そも此人や誰ならん
- ⑥ 下野の國の住人にて
- ⑤ 那須の太郎資高が一子

- ④ 同苗與市宗高なりどうみょうよいちむねたか ♪
- ④ あれ射て見よとぞ望まるあれいみよとぞのぞ ♪
- ⑤ 朝日に弓を射向けんはあさひゆみいむ
- ③ 日の丸よけて矢を放ちひまるや
- ② 身の榮辱は吾知らずみえいじよくわれし
- ⑥ 思へば心定まらずおもほこころさだ ♪
- ⑤ 一徹短慮の御大將いつてつたんりよせんたいしやう
- ③ されば與市宗高はよいちむねたか
- ④ 逞げなる黒馬にたくましくろうま
- ④ 大將近く座を興へたいしやうらかざ
- ⑦ 身の面目はさはなれどみめんほく
- ③ いとも畏き業ならんかしこわざ
- ③ 武運拙くはづれなばぶうんつたな
- ⑤ 源氏の軍の汚名ぞとげんじぐんなをれ
- ④ 暫時たゆたひ居しかどもしばし
- ⑤ 如何て宥させ給ふべきいかゆるたま
- ④ やむなく御誕をかしてみつるこぢやう
- ⑤ 金覆輪の鞍おきてきんぶくりんくら

- ⑤ ゆらりと乗りは乗りしかどゆるりとののり
- ⑦ 兩軍片唾を呑ながらりやうぐんかたづのみ
- ⑤ もしも過まづ事あらばあや
- ③ 一筋の矢に百年のすぢや
- ⑤ 健氣の覺悟ぞ哀れなるけんげかくごあは
- ⑤ 矢頃はかりて控ふればやさころひか
- ⑤ 日影浸しし海の面ひかげひたうみおも
- 立騒する北の風たちさわが ♪
- ⑥ 或は低くまた高くあるひひくたか
- ⑥ これや生死の海ならんしやうしうみ ♪
- ⑤ 目を注ぎたる晴の場所めそいば
- ③ 其場を去らて死なんずとそのば
- ② 命を賭くる武士の意地いのちかぶし
- ④ 馬を渚にうたせつうまなみさ
- ⑥ 時に夕陽傾きてときせきやうかたむ
- ⑦ 黄金をたゝむ浦波をこがねうらなみ
- ⑦ 船諸共に軍扇のふねもろともぐんせん
- ⑤ 右に左にゆらめきてみぎひだり

扇の的

③ 定め難きぞ恨みなる

④ 心の中に祈るやう

④ 別しては我國の神明

⑦ 今の與市を哀れとも

⑤ 此波風をうち鎮め

⑤ 南無や八幡大菩薩と

天に通じておのづから

④ 射よげに見ゆる船の的

④ 矢を抜きとつて打つがへ

④ 宗高馬上に眼を閉ぢて

⑤ 南無や八幡大菩薩

④ 二荒權現那須の湯泉大明神

⑥ 見給ふ慈悲のましまさば

④ 暫時の守護をたび給へ

誠よりなる一心の

風なき波も沈まりつ

④ 宗高心をおししづめ

④ 命をしぼる右手左手

④ よく引きかため氣を香て

④ 浦に響きて鳴く千鳥

⑤ 規ひたがはず要をば

扇は空にひるがへり

④ 花か紅葉か入り残る

⑤ 眺め榮あるありさまに

⑤ 舷叩く一門に

⑦ 响とあげたる関の聲

暫時はなりもやまざりき

④ ひやうと放てば鎗矢の

④ 羽ばたく隙もあらばこそ

⑤ はつしと射切つて矢は海に

④ そよぐ嵐にひらくと

④ 落暉をうけて一入の

⑤ 敵も味方も感に堪へ

④ 箴をならす源氏方

山に響きて海も湧き

夫かあらぬか今も猶

●屋島の浦に打波の  
●譽れ聞ゆる文の上

●音諸共に宗高の  
●實にも千古の武名なり止

小 督 上

●借も櫻町中納言

●重範卿の御息女

●小督の局と申しけるは

●禁中第一の美人とて

●君の御寵愛淺からず

●驪山宮の故事も

●斯くぞと思ひ合されしが

●月には雲の仇ありて

●花に嵐の妬とかや

●時の相國清盛の

小

督

●怨めるよしを聞き給ひ  
●われ此まゝに仕へなば  
●心定めつ烏羽玉の  
●内裏を忍び出て給ふ

●身は數としも思はねど  
●君の御爲に悪かりなんと  
●闇をたよりに本意なくも  
●されば君の御歎

●世にたとふべきものもなく

●晝は終日夜は終夜

●なやませ給ふ御有様

●よその袂も朽ちぬべし

折しも中秋三五の夜

月は澄めども御涙に

御聲いとど曇らせ給ひ

●如何に仲國承はれ

●小督は嗟峨の邊なる

●片折戸せし賤が家に

小

督

忍び居るよしきつるぞ

四 汝これより赴きて

四 尋ねこよとぞ仰せける

六 されば彈正の大弼仲國は

五 寮の駿馬に跨りつ

六 やがて出づるや秋の夜の

春 月毛の駒よこゝろして

雲井にかけれ時の間も

いそぐ心の行方かな

七 露は玉屑に和して

六 金盤ひややかに

五月は珠光を射て

五 貝闕さむしとかや

七 在五の主の牡鹿啼く

六 此山里と詠じけん

五 嵯峨の邊りの秋の夜を

五 命とすだく蟲の音と

秋 ともに澄みゆく月のかげ

小

督

地上の星と見ゆるまで

山越中 光るは露か玉鐙の

春 途のしをりも絶えたれば

真萩小すゝき蒨萱を

馬の蹄に踏みしだき

七 遠の賤がや近の門

五 尋ね侘びつゝ仲國は

四 法輪の方へ志し

四 静々駒をぞうたせける

三 痛ましや小督の局は

三 内裏を出てさせ給ひてより

五 日數もこゝに故里の

三 名残の露に袂さへ

二 乾く間もなきもの思ひ

七 明日は小原の別所へと

六 かねて心に期し給へば

五 今宵限りの別れぞと

三 主人の妻の乞ふがまゝ



小

③ 琴とりいでて端近う

⑤ 月は天心に澄みのぼりて

山越 ④ 葎が下の蟲の音も

何をかくねる女郎花

人に語るも恥かしと

⑤ 遠音にさえて通ひ來るゝ

③ 尋ぬる人の琴の音かゝ

⑤ 爪音しるき想夫戀

④ こゝろ静かに仲國は

④ 塵につき給ふ折しもあれゝ

夏 塵と見る可き雲もなく

秋や怨むる戀ぞうきゝ

我も浮世のさかの身ぞ

③ かきなす琴の自から

③ 峯の嵐か松風か

④ 駒を控へてきく程に

④ さてこそ小督の局ぞと

⑤ 露けき草原踏分けふみ分け

開 小 督 下

⑤ 庵にこそは着にけれく

① 斯くて仲國は

③ 聞きしが如き片折戸々

④ 彈正の大弼仲國にて候ぞ

③ おとなふ聲にやゝありて

⑦ 賤が伏家に内裏より

處や違ひはべりなんと

② 馬より降りてうかいへば

④ これは宣旨の御使者

④ 此戸を開かせ給へかしと

春 ③ 細目に開けし女童

何の宣旨のあるべきぞ

きつゝ折戸押し開けて

書

小

小

督

- ④ 仲國はつと内に入りなかくにうち々
- ⑤ 君には供御をもさこし召されずきみぐご
- ④ などで匿させ給ふぞやかく
- ⑤ 畏けれども御壽命さへかしこごじゆみやう
- ③ 夜もねむらせ給はばこそよ
- ⑦ 上の空とも思し召さばうはそら
- ③ 爲に縮ませ給ふらんためちぢませたま
- ④ 女童してまゐらすればめのわらは
- ⑤ 御文御覽候へとおんふみごらんさふら
- ③ 遂に泣伏給ふこそつひなきふしたま
- ④ 暫らくありて御返事をしばせんかへりごと
- ⑦ 小督は御文戴き給ひこがうおんふみいたたま
- ③ 仲國は更に喜ばずなかくにさらよろこ
- ③ 二度三度繰返しふたびみたびくりかへ
- ④ 漸く認め給ひしかどやうやしたたま
- ⑤ 理せめておはれなれことわり

小

督

- ⑥ 餘人なれば兎も角もよじん
- ④ 春花の朝秋月の夕しゆんくわあしたしうげつゆふべ
- ④ 御琴遊ばされし其砌おんことあそそのみざり
- ⑤ 笛の役にと召されしはふえやく
- ④ 仲國にては候はずやなかくに
- ⑥ 數ならぬ身もしかすがにかず
- ⑤ 得こそは忘れ給ふまじえ
- ④ 御目にかゝらんそれまではおんめ
- ④ 柴垣の根にかたしきてしばがきね
- ③ 月下に一夜を明さんとげつか
- ⑤ 入道殿のこよなうもにふだうどの
- ④ 秋秋かこてば流石女氣のあき
- ⑥ 物數ならぬ自からをものかず
- ⑤ 斯くまで思はせ給ふことか
- ③ 世におふけなき事ながらよ
- ③ さらば通らせ給へかしさらばとほ
- ③ それにも聞し給ひけんそれにもきこたま

- ③ 怨うらみを含ませ給たまふよし
- ④ 此この身みの上うへは厭いとはねど
- ⑤ 我わが大おほ君きみの御おん爲ためならずと
- ⑥ 扱さてこそ思おもひ出いでたるなれ
- ⑦ 淵ふちにも瀬せにも身みを投なげて
- ⑧ 早はや兔とも角かくもなるべきを
- ⑨ 今日けふ迄までながらへ侍はべりしは
- ⑩ うたてや戀こひの執し着やく心しん
- ⑪ 明あけなば小を原はらの別べつ所しよへと
- ⑫ 思おもひ起おこして候さふらへば
- ⑬ 斯かくは一曲きよくたん弾ひぬと
- ⑭ 小こ督がうの言こと葉はに仲なか國くには
- ⑮ 上うは衣ぎぬの袖そでを絞しぼりつゝ
- ⑯ 小を原はらの別べつ所しよへとあるからは
- ⑰ 御ご落らく飾しやくの御おん心こころにや
- ⑱ 君きみの御おん許ゆるしなきうち
- ⑲ いかでさる事ことの叶かなふべき
- ⑳ 重かさねてまゐり候さふらまで

開 一 靜 御 前 止

- ④ 思おもひ止とどまり給たまへかし
- ⑥ 早はや夜よも更よけて候さふらへば
- ⑤ 君きみにも待まちかね給たまふらん
- ⑦ されば柴しば刈かりかりそめの
- ⑧ 別わかれの袖そでも蟲むしの音ねも
- ⑨ しめり勝がちなる白しら露つゆの
- ⑩ いとこまやかに夜よは更よけて
- ⑪ 四か更うの空そらに鳴なる鞭むちは
- ⑫ 都みやこの方かたにぞ消きえにける
- ⑬ 都みやこの方かたにぞ消きえにける 止
- ⑭ 思おもひぞ出いでる唐もろこし土ちの
- ⑮ 七なな歩ほの詩しだに悲かなしさに
- ⑯ ましてやこれは日ひの本もとの
- ⑰ 譽ほまれも高たかき源みなもとの

- ③ 流れの末と言ひながら
- ④ 枝たち折らば自から
- ⑤ 浮世にくねる女郎花
- ⑥ 星の光はうすれけり
- ⑦ さびしき仰蒙りて
- ⑧ 北白川のほとりにて
- ⑨ 静御前を尋ね出し
- ⑩ なさけ容赦もあらし吹く
- ⑪ 引立て行くぞ無慙なる
- ⑫ 濁る言葉のさかしらに
- ⑬ 幹もやかれん浅猿しの
- ⑭ それしも蒔るか鎌倉の
- ⑮ さても此度鎌倉殿の
- ⑯ 北條四郎時政は
- ⑰ 判官殿のおもひもの
- ⑱ 母の禪師ともろともに
- ⑲ 上見ぬ鷲の一とつかみ
- ⑳ 時しも頃は文治二年

- ① 如月中旬の朝まだき
- ② 雁の音信まつさかも
- ③ またいつしかも逢坂の
- ④ 打出の濱に鳴く千鳥
- ⑤ 野路の篠原忍ばれて
- ⑥ うつる膽吹の嶽かげも
- ⑦ 野くれ山暮れ草まくら
- ⑧ きつゝもなれぬ玉銚の
- ⑨ 鎌倉山にぞ着き給ふ
- ⑩ 星かげきえぬ粟田口
- ⑪ 空しくすぎて走井や
- ⑫ これやこの世の關守か
- ⑬ 瀬多の唐橋うち渡り
- ⑭ 涙にくもるかゞみやま
- ⑮ 雲間にかくれ跡もなし
- ⑯ はるゝさぬる旅衣
- ⑰ 道に日敷を重ねきて
- ⑱ いづこを見るも涙の種

- ⑤ 都戀ひしや君こひし
- ⑦ 去年の霜月別れてし
- ⑤ 吉野の深雪いかならん
- ③ ふみわけ入りし人のあと
- ③ したふ心ぞ哀れなるゝ
- ④ 扱も悼はしや静御前
- ④ かまくら殿の仰にて
- ③ 屠所の羊のなよくと
- ④ あやふみあへぬ足ひきの
- ④ 山鳥の尾の長つぼね
- ④ ひかれて御前に出て給ふゝ
- ⑥ この時右大將頼朝は
- ⑤ 御簾高らかに上げさせて
- ④ 静御前にうちむかひ
- ④ 誠に汝は吉野までも
- ④ 九郎に従ひしものなれば
- ③ かならず行方しりつらん
- ③ つゝまず申せと仰せけり

- ⑥ 静は憶する氣色なく
- ④ 何事の御尋やらんと思ひしに
- ④ 判官殿の御行くへ
- ③ 問はせ給ふぞいぶかしやゝ
- ③ 妾は一の華表まで
- ③ 君に隨ひまつりしも
- ④ それより奥は掟にて
- ④ 女の入るを許さねば
- ⑤ 名残惜めど詮方も
- ③ なくく都に立ち歸り
- ③ 目毎に念ずる神佛
- ⑦ 御中陸敷ならせられ
- ⑥ 早く御歸洛あれかしと
- ⑤ 祈り暮し、折なれば
- ③ 唯なつかしの我君の
- ③ 幸ある御便さかましと
- ② 僅ののぞみを樂みに
- ③ 遙く下り來りしをと

夏

わとはいはまの山つゝじ

わかき心はあらはれて

いと哀れに聞えけり

斯くて其日もくれ竹の

④ 一夜二夜と過ぎけるが

④ 鎌倉殿の御使として

③ 梶原平三景時は

④ 磯の禪師を訪問れて

④ あはれ天下に隠れなき

④ 静御前の舞曲をば

③ 上覽あらせんと御誕なり

④ 此よし傳へ給はれと

④ いとおぞそかに申しけり

⑥ 静御前は仰をさ

④ そは思ひも寄らぬ御事哉

④ 判官殿に仕へ申してより

③ 御許もなくよそびとの

③ 前に舞ひたる事あらず

④ 尙此程はこゝち悪しく

④ 起居もまゝならねばとて

④ いなみ申じて歸させければ

⑥ 梶原面目をぞ失ひける

秋  
よろづにひかぬ梶原も

根ざしもかたき姫松の

心はひかんよしもなく

歸り行くこそ笑止なれ

静 御 前 下

③ かくて頼朝公は鎌倉にて

④ 静御前に舞を舞せんとしつるに

② 鼓打なき爲舞はざりきと

② 聞えん事こそ恥かしけれ

④ 早く樂黨を選めと仰せけり

⑥ 嵐になるゝ深山にも

静

御

前

⑤ 松のしらべはあるものを

④ 鼓の音や響くらん

③ もの憂き節ぞしりぬべき

② 鼓には工藤左衛門祐經

① 時の調子の笛の役は

④ 荒浪よする磯にだに

③ 弓矢にすさむ武者迎も

② さて舞の役人は誰くぞ

① 鐘は梶原平三景時

④ 畠山次郎重忠と註せられたり

③ 上のまつ山廻廊の

② 手色打鳴らし待つ所に

① 鼓に従ひしらべを合せ

③ 次つぎの樂黨がくたうを待ちかけたり

② 梶原祐經かぢはらすけつねの右みぎの座ざになほり

① 程ほどなく祐經舞臺すけつねぶたいに上り

④ 祐經すけつね左ひだりの方に居直れば

③ 今いまは不足ふそくもなかるべし

② 姿すがたにちなむ鶴つるが岡をか

① 露つゆにしをるゝ羽衣はとりもの

静

御

前

⑤ 松のしらべはあるものを

④ 鼓の音や響くらん

③ もの憂き節ぞしりぬべき

② 鼓には工藤左衛門祐經

① 時の調子の笛の役は

④ 荒浪よする磯にだに

③ 弓矢にすさむ武者迎も

② さて舞の役人は誰くぞ

① 鐘は梶原平三景時

④ 畠山次郎重忠と註せられたり

③ 上のまつ山廻廊の

② 手色打鳴らし待つ所に

① 鼓に従ひしらべを合せ

④ 畠山はたけやまは漢竹かんちくのやうてうを持ち

③ 鼓つづみに従ひしらべを合せ

② 静御前しづかごぜん此有様このありさまを見給ひて

① 静御前しづかごぜん此有様このありさまを見給ひて

⑦ 一ひとさしと立ちあがる

⑥ 雲井戀くもりのこひしき音をやなく

⑤ 袖そでのみ軽くなびけども

④ 皆みなくれなるの扇あふぎには

③ 割菱縫わりびしぬひたる水干すゐかんに

② たけの黒髪くろかみたからかに

① 夢ゆめにもそれと三保みほの浦うら

④ 霞かすみのひまにたなびきつ

静

御

前

⑤ ひるがへらぬは心なり

④ 深ふかさまことの色いろを見せ

③ 白しろき袴はかまをふみしだき

② 結ゆいひ上げ諸もろふおもかげは

① 天津少女あまつをとめの舞まひの袖そで

⑦ 皆みなくれなるの扇あふぎには

⑥ 割菱縫わりびしぬひたる水干すゐかんに

⑤ たけの黒髪くろかみたからかに

④ 夢ゆめにもそれと三保みほの浦うら

③ 霞かすみのひまにたなびきつ

⑦ そこともしらず美しの

⑤ 初音ゆかしき鶯の

④ 春つげ渡る如くなり

④ 今や神無上の一曲をば

④ なからばかりかぞへけり

④ 祐經心なしとや思ひけん

③ やがてせめをぞ打ちければ

③ 静は君が代をぞ謠ひ上にける

③ 並居る人々これを聞き

③ あら情なの祐經かな

④ せめだに打たずは一折を

③ 舞ひなんものを如何にせん

山越  
なほしばしだに天津風

雲の通ひ路吹きとちよと

祈らぬ者こそなかりけれ

④ 此時静御前思ふ様

④ 敵前の舞なれば

④ 判官殿の御爲にも

④ 思ふ事を謠はばやと

⑥ 飛鳥落す鎌倉殿の

④ 御前を憚る氣色なく

⑤ ひとしほ聲を張上げて

⑦ 賤やしづ 賤の芋環くりかへし

ひかしを今になすよしもがな

夏  
線かへしつる言の葉の

露の玉の緒いのちまで

かけてぞ願ふ夕だすき

③ いと雄々しくも舞納めたり

⑤ さしもに猛き鎌倉武士も

④ か弱き女の一節に

④ 骨節迄も碎かれて

③ たゞ静まりて居たりけり

⑤ げにや静御前の粧は

⑤ 朝日に匂ふ敷島の



⑤ 大和心の人の花

⑤ 幾萬代の末迄も

⑤ 舞ひにしかげの惚ばれて

⑤ 操の鑑に映るらん 止メ

開一 靈馬連

① 人とし言へど人ならぬ

① 人もある世に鴨緑の

② 河に手馴の水飲ひし

② 駒の心のゆかしさを

③ 語るも勿々哀れなり

③ 頃は明治三十有七年

④ 神無月の十四日

④ しかも沙河會戰の第五日

⑤ 馬の主は伊藤砲兵少佐にて

⑤ 己が愛馬の連に

⑤ 打跨がりつ勇ましく

④ 翻りながらに出陣せり

⑦ 指して行方は我軍の

④ 占めし陣地や梓弓

腹帯も今日はいやかたく

轡の響き憂々と

まだほの闇さ月鹿毛の

駿馬のあがき牙え渡り

蹄に砂塵をたてがみや

招く尾花にはげまされ

⑥ 續く強兵エイ〜と

⑤ 押すや砲車の軋る音

④ 寄せては返す連の

⑥ 嘶く聲と諸共に

④ 天地も震ふ勢ひなり

④ 斯くて少佐は陣地なる

③ 山の麓に下りたちて

③ 愛馬をつなぎ別れを惜み

靈 馬 漣

- ① これ漣よ能きけよ々
- ② 汝と我とは東の間も
- ③ 離れがたなみ大君に
- ④ 野にも山にも伏すとても
- ⑤ 神こそしろし召さるらめ々
- ⑥ 盡す誠は千早振
- ⑦ こよなう近き場所なれば
- ⑧ 汝を頼む時ならず々
- ⑨ 暫時が程は別るとも
- ⑩ さはいへ今日は敵陣に
- ⑪ 此所に静まり待ちてよや々
- ⑫ 臙凱戦するまでは
- ⑬ 我遺骸を故里の
- ⑭ 又吾兎も角もなる時は
- ⑮ ヤヨ漣よ聞きわけしかと
- ⑯ 妻子の許におくれかし々
- ⑰ 愛馬のたてがみ撫てさすれば
- ⑱ 馬はさながら物言ふ如く

靈 馬 漣

- ① 名残惜げに我主に
- ② 首に無限の愛惜を
- ③ 人ならなくも漣の
- ④ 敵軍最も優勢にて々
- ⑤ 報告しきりに来りければ
- ⑥ 誠の色としられけり々
- ⑦ 水郡大尉の舍弟
- ⑧ 上等兵喜市も戦死のよし
- ⑨ 別れて少佐はいなんとす々
- ⑩ アイデヤと斗り夕鹿毛に
- ⑪ 心駒は狂はねど
- ⑫ 手綱ひかるゝ我胸に
- ⑬ 鞭うつ如くふり放し々
- ⑭ 陣頭にこそ現れいで々
- ⑮ 五むつれよりつゝうなだるゝ
- ⑯ 示すや志賀の山櫻
- ⑰ たつる鬘たちまちに
- ⑱ かゝる處に陣地より

- ⑦ 少時奮戦したりしが
- ⑥ 虚空に響く敵弾は
- ⑤ 哀れ少佐の胸板を
- ④ はつしとばかりうち砕けば
- ③ 何かは以てたまるべき
- ② 流石きこゆる勇將も
- ① 無惨の戦死を遂げたりけり
- ④ 時しもあれや後陣に
- ③ つなげる愛馬漣は
- ② 何ものにか驚きけん
- ① 一聲高くむせびしが
- ④ 忽ち端綱ふりきりつ
- ③ 止むる馬丁を跳のけ蹴のけ
- ② 陣頭さして幕地
- ① 狂ひたけりて馳せ上る
- ④ 瞬間に少佐の屍に近づきて
- ③ 頭を下げつ眼を閉ぢつ
- ② 流れし血汐をかぎ廻り

- ④ 愁然として立ちたりしが
- ⑤ 遂に屍をゆり動かし
- ③ 物言ひたげに頭をよせ
- ② 悲しき啼聲ふりしぼり
- ① やがて軍服の襟くはへつ
- ④ 扶け立てんと試むる
- ③ その心根のしをらしや
- ② 並居る勇將猛卒も
- ① 馬の心を酌みはかり
- ④ 征衣の袖を浸しけり
- ③ かくする隙も打ちしきる
- ② 敵の砲火に此馬まで
- ① 倒さん事の不憫と
- ④ 少佐の遺骸を其まゝに
- ③ 愛馬の鞍にかきのせて
- ② 從卒をして引かしむれば
- ① 漣漸く心を得つ
- ④ トボくとして下り行く

⑤ 後姿ぞ哀れなる々

⑥ かゝる靈馬の新らしく

義を重んずる日の本の

物の哀れをしる故と々

⑤ 戦語りに残るらん

⑦ 千里の馬は古けれど

⑤ 此聖代に出づること

益良武夫のひたすらに

③ 千代萬代の末かけて

⑤ 戦語に残るらん 止メ

開 ③ 四 條 嘖

③ 借も楠左衛門尉正行は

③ 攻め寄すべきの由を聞き

② 尊氏の老將高の師直

③ 弟正時はじめ一族を率ゐ

③ 吉野の皇居にいたり

⑥ 此度賊軍來り犯さんとす

⑦ 臣もし師直の首を得ずんば

③ 伏して願はくば今生にて

③ 臣等生涯の思ひ出に仕らんと

濺ぐ涙に現れけり々

③ 正行を召され宣はく々

③ 今朕が頼むところも

⑦ 假令戦ひ利あらざるも

④ 奏上し奉りけるは々

⑤ 是れ臣が報効の秋にて候々

⑥ 正行が首級を彼に授くべく候々

③ 一度天顔を拜し奉り

忠義に凝りし精神は

④ 天皇御簾を上げさせ給ひ

④ 朕深く汝父子の忠義を嘉す

③ 亦汝等あるのみ々

⑥ 朕が爲に自愛せよと

四 條 嘜

- ⑤ 厚あつき勅ちよく語ごを賜たまはりければ
- ③ 御ご前ぜんを退しりぞき控ひかへしに々
- ④ 辨べんの内ない侍しとよばれたる
- ③ 見みるも映よき上じやう臈らふを
- ② 下くだし給たまふとありければ々
- ① 正まさ行つらかたく辭じし奉たてまつり々
- ⑥ とても世よに生な存がらべくもあらぬ身みの
- ③ かりの契ちぎりをいかでむすばん
- ④ かくなん一首しゆを捧さげおき
- ⑤ これぞ最後さいごの參さい内だいなると
- ⑥ 名な残ごりをししくも皇くわう居きよを出いて
- ④ 軀やぶて先せん帝ていの御ご廟やうに拜はい別べつし
- ③ 如に意い輪りん堂だうの門と扉びらに
- ④ 鏃やじりを以もつて姓せい名めいを記しるし其その未すゑに

③ 正行感涙に咽むせびつ々

④ 畏かしこき邊あたりの仰おほせにより

③ 見みるも映よき上じやう臈らふを

② 正行かたく辭じし奉たてまつり々

⑥ とても世よに生な存がらべくもあらぬ身みの

③ かりの契ちぎりをいかでむすばん

④ かくなん一首しゆを捧さげおき

⑥ 名な残ごりをししくも皇くわう居きよを出いて

③ 如に意い輪りん堂だうの門と扉びらに

③ かへらじとかねて思おもへば梓あづさ弓ゆみ

③ なき數かずに入いる名なをぞとどむる々

⑥ 絶せつ命めいの和わ歌かを彫えりつけて

④ いざ諸もろ共ともにいさましく

⑥ 三さん千せん餘ご騎きを引いん率そつし

④ 四し條じやう嘜なに向むかはせけり々

⑥ 河かは内うちの國くにに押おし入いりて

④ 六まん萬たいの大たい兵へいを魚ぎやう鱗りんに備そなへ

⑦ 素もとより死しを極きはめたる楠くすの勢せい

四 條 嘜

- ⑤ 是これにて思おもひ殘のこす事こと更さらになし々
- ⑤ 賊ぞくと雌し雄ゆうを決けつせんと
- ⑤ 正しやう平へい三さん年ねん陸むつ月つき初はじ旬め
- ⑦ 此この時とき已すでに高かうの師もろ直なほは
- ⑤ 飯いひ盛もり山やまの麓ふもとに陣ちんし
- ⑤ 武ぶ威い嚴げん重ちゆうに見みえけるが々
- ⑤ かゝる大たい軍ぐんをもものともせず

⑤ 武威嚴重に見えけるが々

⑤ かゝる大軍をもものともせず

旭  
膽駒嵐に菊水の  
うち翻し悠然と

清き流れの旗印し

四 賊兵四方に群がりより々

四 唯一もみとあせれども

六 心もかたき楠の

五 暫時勝負も荒鐵の

五 刀風に賊は斬たてられ々  
大落  
沸もかへらんばかりなり々

七 此時正行不意に敵の本陣  
に斬り入りければ

五 あはや師直討たるべく見えたり  
しが 々

四 賊の勇士上山六郎左衛門高元 四 師直の甲冑を引かついで々

五 我こそ高の武藏の守と偽りて 四 防ぎ戦ふ其隙に

四 師直辛うじて遁れたり々 三 かくとも知らず正行は奮戦し

五 遂に武藏守を討取ければ

六 天地に拜し喜び給ひしも

四 已にして其偽なるを知り

四 遁る師直のがしはせじと

四 勇を鼓して追ひすがりしも々  
大にいかり

四 嗚呼痛ましや正行も正時も

五 急所の傷手に力盡き

七 残る股肱の人々も

五 身に百創を被りて

四 進退茲に谷まれり々

六 されば正行聲振上げ々

五 今は早これまでなるぞ

六 賊の手に獲らるゝ勿れと

五 遂に弟正時と刺ちがへ

三 哀れ廿三歳を一期とし

五 北に向ひて斃れけり々

四 さる程に辨の内侍は

三 正行の戦死を聞ゝて泣沈み々

- ⑥ 否いなむは容いるゝにいや優まさる
- ⑤ 公きみが情なさりにもとるとも
- ③ さはれ天子てんしの御許みゆるしうけ
- ③ 妾はらは君きみが妻つまぞかし々
- ⑦ 如何いかで節せつをば破やぶるべきと
- ⑥ 緑みどりの髪かみも世よの業わざも
- ⑥ 思おもひさり捨すて龍門りゅうもんの
- ③ 里さとの庵いほりに墨染すみぞめの
- ③ 衣ころもかたしき正行まさつらの
- ③ 冥福めいふくを祈いのり終をはりけり々
- ③ 池いけよしや吉野よしのの山櫻やまざくら
- ③ 盛さかりもまたて北風きたかぜに
- 〰 散ちりきといへど香かんばしき々
- ③ 名なは千載せんざいの後のちまでも
- ③ 忠義ちゅうぎの鑑かみと謠うたれて
- ⑤ 青史せいしに譽ほまれをとゞむらん 止メ

開 宇 治 川 止

- ② 昇のぼる旭あまひの將軍しやうぐんと
- ② 世よにうたはれし義仲よしなかが
- ① 都みやこにおける狼籍らうせきは
- ① 平相國へいしやうこくの專横せんわうに
- ③ 遙はるかにまざる由よしを聞きき
- ③ 院ゐんの御心休みこころやすめたてまつ奉ほうらんと
- ③ 前さきの兵衛ひやうゑの佐頼朝すけよりともは
- ④ 範頼のりよりよしつね義經たいしやうを大將たいしやうとして
- ④ 先まづ數萬騎すうまんきの軍兵ぐんびやうを
- ③ 都みやこへこそはさしむけけれ々
- ⑥ 茲こゝに佐々木ささき四郎高綱しゅうたかづなは
- ⑤ 出陣しゅつちんの御暇おんいとまごひ乞ことして
- ④ 鎌倉殿いまくらどのにまみえしに
- ④ 殊ことの外ほかなる御喜悅ごきえつにて

③ 聞ゆる名馬生月を

④ 高綱面目身にあまり

⑤ 宇治川の真先渡し申すべし

⑥ 臣死したりときこしめさば

⑦ もし生存へてあるならば

⑧ 思し召し給ひ候へと

⑨ 頃は壽永三年陸月中旬

⑩ 靡く鬣くしけづり

かげもうつろふ由井が濱

③ 下し給ふとありければ

④ 今度この賜のたすけにより

⑤ 敵軍いまだ敗れずして

⑥ 他人に先んせられきと知り給へ

⑦ 先陣は高綱なりと

⑧ いといさぎよく申しけり

⑨ 鎌倉山の朝風に

⑩ 勇み嘶く生月の

繪くが如き江の島を

秋  
左手に眺めこよろぎの

杉の木立に蔽はるゝ

② はや麓をば三島江や

春  
あし鷹山の山の上に

實にや御國の姿とも

③ 去程に梶原源太景季は

④ 原に人馬を休めつゝ

⑤ 多くの馬を見てありしが

⑥ 優る馬こそなかりければ

大磯小磯も時の間に

⑦ 箱根權現ふし拜み

⑧ 沼津の右手に名にし負ふ

雲を貫く富士の嶺は

⑨ 打仰がるゝ景色なり

⑩ 心浮立つ浮島が

⑪ 討手に上る人々の

⑫ 己が賜はつたる磨墨に

⑬ さも誇りかに見えつるに



- ⑥折しも遙の後陣より
- ⑤さはへる馬をひかせつゝ
- ④いそぎで上る一群を
- ④誰なるらんと眺むれば
- ④四ッ目うつたる旗印々
- ⑥佐々木殿とはしれたれ共
- ⑤いと訝しきは彼の馬なり々
- ④君御秘藏の生月に
- ⑥紛ひなきこそ不思議なれ
- ④吾屢々生月を懇望したりしも
- ④遂に御許したまはらず々
- ⑥さてはこの景季をば
- ⑤佐々木に思召替られしよな
- ④左らば是非なし今此所にて
- ⑤佐々木と引組み刺交へ
- ④君に遺恨をはらさんと
- ④氣色ばみてぞ待受ける々
- ④高綱かくともしらま弓

霞たなびく絶之間より

彼方を見ればコハ如何に

- ④梶原源太腕を張り
- ④肩怒らせてひかへたり々
- ⑥よろづにさとき高綱は
- ⑤かねて景季生月を
- ④君に所望したりしよし
- ④それを遺恨に思ふめり々
- ⑥やうこそあれとうなづきつ
- ⑤何氣なき様に近寄れば
- ④梶原行手に立ち塞り々
- ④ヤア佐々木殿には其生月を
- ④たまはり上り給ふかと
- ③言葉鋭く問ひかくれば
- ④佐々木は態と落着きて
- ③否とよ申すも面伏ながら
- ④必定敵は宇治の橋を引つらん
- ④去迎乗て渡さう馬はなし

- ① 生月せいげつきを申請まをしうりばやと存ぞんぜしも
- ② 御邊ごへんの申まをさせ給たまふだに
- ③ おんゆるるされなき物を
- ④ 高綱たかつななどの申まをすとも
- ⑤ いかで賜たまはるべう筈はずもなし
- ⑥ よし後日ごじつに御勘當ごかんたうあらばあれと
- ⑦ 舍人とねりどもをかたらひて
- ⑧ 窃ひそかに生月せいげつきを竊ぬすみ候まふらふと
- ⑨ 誠まことしやかに申まをしければ
- ⑩ 梶原かぢはら俄にはかに顔色がんしよくやはらげ
- ⑪ さては左様さやうに候まふらひしか
- ⑫ 我われこそ先さきに盗とるべきを
- ⑬ 心こころも解とけてともぐらに
- ⑭ おくれたりきと打笑うちわらひ
- ⑮ おくれたりてふ梶原かぢはらの
- ⑯ 語り合あひつゝ進すすみけり
- ⑰ おくれを取とらん識しるしとも
- ⑱ 今いまの言葉ことばは後のち遂つひひに

⑤ 知らぬ事こそ是非せひなけれく

開 宇治川 下

- ① さる程ほどに御曹子おんざうし義經よしつねは
- ② 二萬五千餘騎にまんごせんよきを引率いんそつし
- ③ 伊賀路いげぢを越こえて宇治川うぢがはの
- ④ 邊ほとりにこそは着つき給たまひしが
- ⑤ 折をりしも睦月むつきの末すゑなれば
- ⑥ 比良志賀山ひらしがやまの雪凍ゆきこほり
- ⑦ 解とけて漲みなぎるみづらみの
- ⑧ そぐ激流げきりうすさまじく
- ⑨ さかまく水みづは岸きしをうち
- ⑩ 音おとドゥーくと鳴なり響ひびき
- ⑪ 大地たいちゆらめく斗ぼかりなり
- ⑫ 既に敵軍橋てきぐんはしを引ひき

⑥ 大綱を張りさかも木を翼なき身の如何にして

④ されど血氣の御曹子

④ 川端近くうち出でて

⑥ 足利又太郎忠綱は

④ 鬼神にてはよもあらし

④ 優り劣りは無きぞかし

⑥ 下知に従ひ畠山重忠は

④ いひも終らぬ時しもあれ

夏

つなぎて流しかけければ

渡らうべくも見えざりけり

④ いかでためらひ給ふべき

④ 去ぬる治承の合戦に

⑤ 此の川渡しけりとさく

④ 況て利根北上の急流と

④ 渡して見よと仰せけり

⑤ それがし瀬踏仕らんと

⑤ 平等院のうしとらに

⑤ 香りも高きたちばなの

④ 前後争ふ猛者あるにぞ

⑤ 前にうたせる若武者は

④ 船の梅の梶原にて

咲き匂ふらん山吹の

⑦ 駒は天下の逸物にて

⑤ 敵も味方も兩岸に

④ さしもの激流ものともせず

③ その有様はさながらに

④ 小島が崎より乗入れて

④ われは如何にと見てあれば

④ 色をも香をも後ぞしる

秋 さて續けるは今もかも

花色威の佐々木なり

⑥ 騎手もきこゆる手だれ故

④ 鳴りを鎮めて見詰めたり

④ 浮つ潜りつ競ひ行く

⑤ 若鮎さばしる川なみに

- ④ 鵜を放ちたる如くなりな
- ④ ヤア梶原殿腹帯が延て候ぞかぢはらのはるびのびさくらふ
- ④ 言はれて梶原驚きてかぢはらおどろ
- ④ 左右の鎧を踏みすかしさゆうのよろいあぶみふ
- ⑥ 佐々木は其間につと抜てささきそのま
- ④ 對の岸にぞ打上げけるむかひきしうちあ
- ⑥ あせれどはやき水勢にすゐせい
- ④ 篋藥形にぞわたしけるのだめがた
- ④ 秋 かし濁されて磨墨のにじろ
- ⑥ 佐々木は後より聲をかけささきあとこゑ
- ④ 疾くくしめずば危しととあやふ
- ③ 手綱を馬の結髪にすてたづなうまゆがみ
- ④ 腹帯を解きて締めなほすはるびと
- ⑤ 眞一文字に乗りわたりまいちもんじ
- ⑦ おくれたりしか残念とざんねん
- ⑤ おし流されて梶原はなが
- ⑦ うたてや人の言の葉にひとこと
- 締めし腹帯のそれならてしはるび

開 湖 水 渡

- ① 夫良禽は林を擇みそれりやうきんはやしえら
- ② されど一旦身を許したんみ
- ③ 善惡ともに身を捨ててぜんなく
- ③ 武名は今もかいやけり止ぶめいいま
- こゝろの綱の弛びかやつなゆる
- あらはれ渡る生月のわた いけつき
- はまれも高さ高綱のたか たかつな
- ⑤ 武名は代々に耀きけりぶめいよよ
- 春 宇治の川霧たえうぢかはきり
- 光とともにさしのぼるひかり
- ⑤ 武名は代々に耀きけりぶめいよよ
- 賢者は君をけんしや きみ
- 主とたのみし人のためしゆう
- ③ 桀狗が堯に吠ゆるなるけつく げう

湖

水

渡

④ 忠義をなすも武夫の

⑦ 茲に明智日向守光秀は

⑤ 味方もろくも打敗れ

③ はやくくれなく聞えけり

⑥ 明智左馬介光俊は

⑤ 軍の様子見んものと

敵に粟津の原こえて

④ 大津の宿にかゝる頃

④ 堀秀政が一萬騎

④ 弓矢の意地と知られけり

⑥ 天王山の一戦に

④ 同勢四方に散亂すと

④ 安土の城の留守居なる

④ 君の先途の覺束なく

急げばまはる瀬田の橋

もみにもんでぞ打出の濱

④ ハツタと出逢ひし大軍は

④ 光俊キツと思ふやう

湖

水

渡

④ 敵勢こゝに来るからは

④ 坂本城こそ大事なれ

⑤ 小冠者ばらに出逢うて

④ 末代までの無念なり

⑤ 光俊やがて大音聲

④ 天王山を取り切りし

③ いざ光俊が一期の名残

⑤ 味方の勇氣はげしまして

⑤ 巴市に斬り靡け

④ 君の妻子のゐますなる

④ さはさりながら今此所に

④ 槍もあはさで退かんこと

⑦ 一あてあて返さばやと

④ やをれ秀政來りしか

④ 武略は流石の敵なるぞ

⑤ 語りつがせんもの共と

⑤ 哄とばかりに突きかゝり

④ 西に東に出没し

湖

水

渡

④鬼神不思議の働きに々

⑤浮足立ちし汐合を

⑥さつとばかりに乗り抜けて

④馬は忽ち飛ぶごとく々

⑤ザンブとばかり跳り入る々

⑥騎手はもとより古今の達者

⑤神か人かと見るばかり

⑤眼の限り一碧の

緋威着たる左馬の介

④さしもの大敵もてあまし

④こゝと見て取る一呼吸々

⑤一息呑みしかけ聲に

⑦名に負ふ近江の湖に々

⑦馬は天下の逸物なり

⑤眞一文字に乗りさる様は

③水や空、空や水

波を蹴立つる大鹿毛に

一際目に立つ武者振に

湖

水

渡

⑦無双の名人永徳が

墨繪の龍の陣羽織

或は緩に又急に

④馬疲るれば人助け

⑤さしものに廣き湖を

④追手の聲も氣をとられ

④あれよくと言ふばかり々

⑤射かけん人もなかりけり々

濱の此方にうち上り々

⑥丹誠こめて繪きたる

比叡山嵐に翻へし

⑤揚鞭ふるふ勇ましさ々

⑤人疲るれば馬により々

⑤事ともせざる不敵さに

⑥酔へるが如き心地して

⑤只一筋の遠矢だに

光俊やがて唐崎の

③馬道具の水走らせ

- ① 愛馬のたてがみ撫上げて
- ② 如何に大鹿毛承はれ
- ③ 半は汝が功ぞ
- ④ 命と共に殺さんは
- ⑤ 天晴汝はながらへて
- ⑥ 修羅の巷を走せ廻り
- ⑦ 我武名をも後の世の
- ⑧ やよ大鹿毛よ心得しかと
- ⑨ 十王堂の柱につなぎ
- ⑩ 香の包をおし開き
- ⑪ 哀別離苦の涙聲
- ⑫ 光俊多年武勇の譽れ
- ⑬ かゝる名馬を光俊が
- ⑭ いとく惜き心地ぞする
- ⑮ 武勇優れし主をとり
- ⑯ 流石は明智が馬なりと
- ⑰ 武邊の語りに残せかし
- ⑱ 精神こめていひさかせ
- ⑲ 臆て矢立を取り出し
- ⑳ 天正十年六月十四日

- ① 明智左馬の介光俊
- ② 筆太々とかき残し
- ③ 馬も名残を惜みてか
- ④ 見返り勝に静々と
- ⑤ 心のうちや如何ならん
- ⑥ 五三の桐の世となれど
- ⑦ 日本一の名馬ぞと
- ⑧ 舊主の名さへ武勇さへ
- ⑨ 朽ちせぬ譽れ今の世に
- ⑩ 琵琶の湖琵琶の音に水々
- ⑪ 此馬を以て湖水を渡るものなりと
- ⑫ いざとばかりに立去れば
- ⑬ 聲も哀に嘶くを
- ⑭ 坂本城に引上げし
- ⑮ あはれ枯梗の花かれて
- ⑯ 此の大鹿毛は秀吉に
- ⑰ いと珍重に召されたり
- ⑱ 春 花と稱へて幾千代も
- ⑲ 比良の山より猶高く
- ⑳ 留めて語るこそ目出けれ

開一 義士の本懐

- 一 茲に播州赤穂の浪人
- 二 大石内藏之助を始めとし
- 乙 義に勇みたる同志の面々
- 三 不俱戴天の君のあだ
- 三 吉良上野の介義央を
- 三 討ちて本懐とげばやと
- 四 難苦に身をばやつしつゝ
- 四 憂き年月を送りしが
- 六 天の助けか優曇華の
- 四 花咲くときぞ來りける
- 六 時しも元祿十五年
- 五 師走中の四日の眞夜中頃
- 四 浮世の人のねの刻を
- 四 はかりて集ふ忠臣義士

- 七 精神も服装も打揃ふ
- 六 色はにはへる四十七
- 五 文字のしるしに討入りの
- 四 部署さだめしづくくと
- 四 吉良が邸に押寄せたり
- 七 折しも雪は晴れ渡り
- 月天心に影冴えて
- 限なくてらす銀世界
- 被く兜やうちものに
- うつる桂の花のいろ
- 三 星かと紛ふばかりにて
- いと勇ましく見えにけり
- 四 かくて内藏助は表門に
- 四 早うち入の下知すれば
- 六 豫て用意の繩梯子
- 五 門の左右にうちかけて
- 四 第一番に片岡源吾右衛門
- 四 猿猴の如く馳せ登り

打まはり



- ④ ヒヲリと内にをどり入るゝ
- ⑤ 第二番に磯貝十郎左衛門
- ④ 第三番に大高源吾
- ④ 續いて哄ととび入りたりゝ
- ④ やがて大門の鑰うばひとり
- ④ サツと扉を打開けば
- ④ 内藏助を真先に
- ④ 同志廿餘人押し入りつ
- ④ 後をばヒシと閉しけりゝ
- ⑥ 裏門に向ひし大石主税の同勢も
- ⑤ 玄關前に來合すれば
- ④ 一同聲をうち揃へ
- ⑥ 浅野内匠頭長矩の家臣
- ⑤ 亡君の仇を報せん爲
- ④ 只今館に推參せり
- ⑥ 出合給へ〜と呼ばはつたりゝ
- ⑦ もとより大石内藏助は
- ⑥ 山鹿流の達人なれば

- ⑤ かゝれとらつや陣太鼓ゝ
  - ⑦ 静けき天に鳴り渡る
  - ⑥ 響に應じ横川勘平大高源吾
  - ⑤ 大槌にて玄關のまひら戸を打破り
  - ⑤ 難なく内に込み入つたりゝ
  - ④ 此時吉良の家臣
  - ④ 新海彌七郎
  - ⑥ 狼狽ながらも打出づるを
  - ⑤ 堀部安兵衛渡り合ひ
  - ④ たゞ一刀に薙倒すゝ
  - ④ 續いて出る左右田源八ゝ
  - ④ 喚きかゝれる鋒先を
  - ④ 不破數右衛門受流しゝ
  - ④ 返す刀に車斬にぞなしたりゝ
  - ⑦ これより敵も味方も入り亂れ
  - ⑥ 火花を散らし戦へども
- いかに義士にぞ敵すべき
- 皆悉々討たれしが

猶も書院の隅に蠢く人影々 四 不思議のものと引出せば

四 足腰ぬけし茶坊主なり々

六 汝命の惜からば

五 主人の寢所を案内せよと

四 いはれて茶坊主一議なく

六 いざり乍らに指示せり々

七 いでやとばかり押し入るに

六 夜のふすまは其儘ながら

主はいつしか空蟬の

もぬけの殻にはりもぬけ々

夜着に雙手をさし入るれば

四 ね肌のぬくみ猶残れり

六 遠くは去らじいざ詮議と

五 納戸の隅々長局

四 隈なく探し索むれども

三 めどす敵の影もなし々

四 嗚呼口惜やいかにせん

六 年月肺肝を打碎き

五 千辛萬苦をつくし々に

四 此期にのぞみ甲斐もなく々

七 本懐とげずもあるならば

六 死すともいかで瞑目せんと

三 齒がみなしてぞ居たりける々

四 かゝる處に大石内藏助

四 豫て勝負は明六ッ迄と定めしに

四 未時刻に間もあるべし

四 疾くく敵を得られよと

五 はげしき下知に勵まされ

また八方に立向ふ々

七 折もこそあれ雑部屋に

六 かすかに物音きこゆるにぞ々

五 板戸をハタと蹴破れば

四 中より烏炭やきものを

四 なげかけく二人の武士

四 太刀ふりかざし突出づるを々

③ 茅野和助大石瀨左衛門

⑦ 此時間十次郎は

⑤ 潜み残れる一人に突きかれば

④ 髻つかみなげ出したたり々

下には白むく上に綾

それかあらぬか怪しやと

④ 去年亡君の斬附給ひし

⑥ かくては最早疑ひなしと

⑥ 一同こゝに寄集へり々

④ 得たりと兩人に斬り結び

⑥ 十文字の槍うちしごき

⑥ 武林唯七とんで入り

⑦ 如何なる者かとよく見れば

さらめく小袖吉良殿か

③ 肩のあたりを開き見るに

④ 太刀さすの跟歴然たり々

⑤ あひづの呼子吹ならせば

④ されば内藏助は吉良殿に打

むかひ

③ 只管切腹をすゝむれ共

④ 氣早の唯七堪り得ず々

④ 吉良の肩先斬下げたり々

④ 粗忽のふるまひ致たされまじ

③ 既に争はんとせしが

④ 十次郎は上野の止めをさし

⑦ 折しも明くる東雲に

聲も忠義を壽ぎて

③ 踏しだきつゝ悠然と

④ 返事も得せぬもどかしさに

④ 皆様御免候へと

③ 十次郎は唯七を突きのけつ

④ 一番槍は拙者にて候ぞと

④ 大石の指圖により

③ 唯七は首をこそは上たりけれ々

塀離るゝ小雀の

明六ッ時や六の花々

⑤ 無縁寺さしてぞ引揚げるく

開一 橋中佐

- 一 それ義は奏山よりも重く
- 二 死は鴻毛よりもかるしとかや
- 三 まこと勇將の決戦を
- 四 しのぶるだにも勇ましや
- 五 頃は明治甲辰の秋
- 六 八月三十一日の未明
- 七 大島師團の一驍將
- 八 兒玉陸軍少將は
- 九 昨日の戦ひ意の如くなら
- 十 石原關谷の兩聯隊を
- 十一 遼陽首山の要害たる
- 十二 向陽子の堅壘に
- 十三 嚴しく夜襲せしめたり
- 十四 之が先手の大隊を

- 一 率ゐる人はたれぞそも
- 二 かつて東宮御附武官として
- 三 其名も高き橋中佐
- 四 初夜の村雨名残なく
- 五 晴れて雲間を洩る月は
- 六 邊り隅なく輝きけり
- 七 夜襲に適せぬ空なれど
- 八 躊躇べきにあらざれば
- 九 野邊の草露踏むだにも
- 十 こゝろ置きつゝいましめて
- 十一 斷涯絶壁攀のぼり
- 十二 吽と喚いて突きかくる
- 十三 不意の夜襲に敵兵は
- 十四 狼狽ながらも頑強に
- 十五 命と頼む塹壕を
- 十六 堅く守りて抵抗す
- 十七 橋中佐は北史笑み
- 十八 あなもの／＼の醜草と

⑤ 敵兵二三薙ぎ倒し

⑥ 大和丈夫一齊に

⑦ さしもに堅き敵壘も

⑧ 高くひらめき萬歳の

⑨ 敵は無念に堪へざりけん

⑩ 我を襲ひてかこみうつゝ

⑪ 銃砲丸の面には

⑫ 今のはばらに立惑ふゝ

⑬ 飛び来る敵の弾丸は

⑤ 血刀揮ひ塵けば

⑥ 我劣らじと奮戦すゝ

⑦ 我手に歸して日の御旗

⑧ 聲は山河を震盪せりゝ

⑨ 新手を代へて鋭くも

⑩ 雨や霰と降りしきる

⑪ 生き残りたる兵も

⑫ 天か命かはた時か

⑬ 中佐の左手を貫けりゝ

④ それと認めし軍曹内田精一は④中佐のそばに駆来りゝ

④ 大隊長殿危険なり

④ 一時退却せられよと

⑤ 中佐は神色自若として

⑤ 慣習とはいへさりながらゝ

⑤ 我のみ何條ひかるべきゝ

⑥ 恰も皇太子殿下の御生誕日なれ

⑥ 一旦占領せし敵壘を

⑥ 獨子が不名譽のみならず

④ 千金の御身希くば

⑥ しきりにすゝめたりけるが

⑤ うつも討たるゝも戦場の

③ 斯くまで部下を斃されて

③ 今日こそは葉月の晦日

⑦ かゝる茅出度吉辰に

⑤ 再び彼に渡さんこと

⑦ 我帝國の武威にかんするなりゝ

① 喃内田軍曹よ

② 戦死の覚悟たのむぞと

③ 勞りながら言葉なく

④ 時しもあれや敵彈の

⑤ 流石さこゆる勇將も

⑥ 内田は驚き抱き上げ

⑦ 空を劈く砲彈の

⑧ されば中佐を肩にかけ

⑨ 又もや飛び来る敵彈は

① 汝も我とともに

② 勵されたる軍曹は

③ 只感涙に咽ぶのみ

④ またも左肩を貫けば

⑤ 後にハタと倒れけり

⑥ 聲を限りに呼び起せど

⑦ 外に應はなかりけり

⑧ 麓に下る一刹那

⑨ 哀れ中佐と軍曹の

① 腹と胸とを射通せり

② はや東雲の明近く

③ 紅染むる草の上を

④ 身にこたへてか軍曹は

⑤ 己が傷手をうち忘れ

⑥ 此時中佐は眼をみひらさ

⑦ さばれ命は惜からず

⑧ 上御一人に對し奉り

⑨ 其罪謝するに言葉なく

① 倒れ重るころほひは

② 硝煙四方に立置めて

③ 渡る秋風沁々と

④ 漸く我によみがへり

⑤ 中佐をたすけ立てんとす

⑥ 嗚呼吾事已に終はんぬ

⑦ 多くの部下を殺ししは

⑧ また下は同胞にむかひ

⑨ 返すくも遺憾なりと

● 我身の上をかへり見ず

● 部下を憐むまごころは

● 實に優しくも尊けれ

● 聲は微に言葉少なきも

● 一言一句悲壯にして

● 鬼神も爲に泣きつらん

● 内田軍曹は涙を揮ひ

● 再び中佐を背負ひつゝ

● 行かんとすれど甲斐もなし

● 胸の傷手に力つき

● 進退こゝに谷まれど

● なほも中佐を其まゝに

● 見捨てん事の忍び得ず

● こゝろと共に身をもたえ

● 泣くより外はなかりけり

● 折から來かゝる從卒は

● 此有様を見るよりも

● 我を忘れて走りより

開 ● 大 高 源 吾

● 扶け上げつゝ己が背に

● 中佐を移しなくくも

● 後陣へこそは還りけれ

● 嗚呼悼ましや橘中佐は

● 朝の嵐に誘はれて

● 夏 身は遼陽の荒野邊の

● 草の葉末におく露と

● 消えて果敢なくなりけるも

● 名は千載に橘の

● 大隊長とうたはれて

● 青史の上を飾らん

● 青史の上を飾るらん 止メ

● 君恥しめらるれば

● 臣すなはち死すと云ふ

- ① 亡き身の果は淺茅生の
- ② 名は後の世に留まりて
- ③ 頃は元祿十五年
- ④ 怨みも積る白雪を
- ⑤ 色は匂へど散りにける
- ⑥ 文武の道にすぐれしは
- ⑦ 俳名子葉と號しけり々
- ⑧ 松の廊下の刃傷に
- ⑨ 殻を失ふてで蟲か
- ⑩ 下に屍はくちぬとも
- ⑪ 青雲九天の上に高し々
- ⑫ しかも師走の十四日
- ⑬ 赤き血汐に染めなしし
- ⑭ 四十七士のそが中
- ⑮ 大高源吾忠雄にて
- ⑯ 主君淺野長矩殿
- ⑰ 御家斷絶の其後は
- ⑱ 身をはなれたる蓑蟲の

- ① 果敢さま様に變れども
- ② 動かぬ思慮に従ひつ
- ③ 仇家の様子を伺ひつ
- ④ これ屈竟の時なりと
- ⑤ 明日をひそかに松坂町
- ⑥ 竹召ませと聲高に々
- ⑦ 今しも歸る兩國の
- ⑧ 果敢さま様に變れども
- ⑨ 動かぬ思慮に従ひつ
- ⑩ 仇家の様子を伺ひつ
- ⑪ 月日は廻る小車の
- ⑫ 中の三日となりけり々
- ⑬ これ屈竟の時なりと
- ⑭ 明日をひそかに松坂町
- ⑮ 竹召ませと聲高に々
- ⑯ 今しも歸る兩國の
- ⑰ 操はかたき大石の
- ⑱ 岡崎町に居をかまへ
- ⑲ 時の到るを待つ折しも
- ⑳ 廻りめぐりて極月の
- ㉑ 上下へだてぬす、拂ひ
- ㉒ 身を竹賣に装ひつ
- ㉓ 吉良が屋敷の裏表
- ㉔ 呼びつゝ隈なく見廻して
- ㉕ 橋の袂に出逢ひしは



- ④ 俳人寶井其角なりはいじんたからるきかく々
- ④ いと氣の毒に思ひけんいきどくおも
- ④ 厚くもてなし語るやうあつかた
- ④ 苦しからずば我宿にくるわがやど
- ③ 源吾は首をうなだれてげんごかうべ
- ⑤ 面目もなき次第やとめんぼくしだい
- ④ 其角はやがて筆取りてきかくふでと々
- ⑦ 一句を認め大高にくしちやおほたか
- ④ 子葉は即時に筆取りてしえふそくじふでと々
- ④ 其角は子葉の姿を見てきかくしえふすがたみ
- ③ ある料亭に誘ひつゝれうていいざな
- ⑤ 何故に斯くは落ぶれたまひしぞなにゆゑかおち
- ④ 來給へかしと進むればきたたますすむ
- ⑥ 主家の不祥は身の不祥しゅかふしやうみふしやう
- ③ いと慇懃に語りけるにいんぎんかた
- ④ 年の瀬や水の流れと人の身はととしせみづながひとみ
- ⑥ わきをとしひて望みしかばわきおぞ
- ③ 明日またるゝ其實船あしたまたるそなたからぶね

- ③ かくは一句を添へたりきかくくそ
- ⑥ 笑はゞ笑へ今の身をわらわらいまみ
- ⑥ 只一片の誠心をただいっぺんまごころ
- ⑤ 微笑ながら別れけり々ほほえみわか
- ⑤ 雲を喚びたる龍の如くくもよびりゆうごと
- ⑦ 吉良の屋敷に討入ればきちらやしきうらい
- ⑤ 其閑静さはたちまちにそのしづか
- ④ 其角は其夜隣りなるきかくそのよとな
- ④ かくと聞くより庭先のかくきよにばまき
- ⑦ 明日を待つなる心にはあしたまこころ
- ⑤ そしらばそしれ此なりをこの
- ⑤ 知るは天のみ我のみとしんてんわれのみ
- ⑥ かくて定めし日となればさだめしひ
- ⑥ 一味の人数馳せ集り々いちみじんずはあつま
- ⑥ 降り積む雪に照る月やふりつゆきてるつき
- ⑤ 修羅となりたる獅子奮闘々しゆらししふんとう
- ④ 本田の屋敷にありけるがほんだやしき
- ④ 松の梢に走せ登り々まつこすねはのぼ

七月つぎをたよりに見下みおろせば

五さ笹さをかつぎし賤しづの男をが

四ばんぶ萬夫ふ不撓たうの勇者ゆうしゃとして

四そのた其太刀た風かぜの勇いさましさ々

四あつば天晴はれ子し葉え氏し今こん生じやうの

五のぞ望ぞめば源げん吾ごは莞爾にっこと笑わらみ

四つきゆき月雪ゆきの中なかや命いのちの捨すてどころ

七あ後ちと白雪しらゆきを蹴け立てつゝ

七そのつき其月つきよりも雪ゆきよりも

六きのよ昨日けふは兩國りやうこく橋はしぎはに

四けふ今日けふは主君しゆくんの仇あだをうつ

三りまた數多あまたの敵てきにわたり合あふ

三きかく其角かくは子葉しえふの姿すがたを見て

四わか別わかれに一句くたま給たまはれと

大落

敵てきを追おうてぞ進すすみける

六きよ清きよさは彼かれが心こころなり

夏

忠我ちうぎに重おもき泉岳寺せんがくじ

昔むかしを今いまに繰くりかへし々

五にほひ句こあまりて今いまもなほ

五ぶし武士ぶしの鑑かみと稱たへけり止とメ

開 夜 の 鶴

一およ凡おそ義ぎの爲ために道みちを忘わすれ

一なめし例れいを爰こゝに姫小松ひめこまつ

三わすれ遺愛いがたみの三人たりの兒こと

並ならぶ石碑せきひにむす苦くるも

三ことば言葉ことばの花はなは敷島しきしまに

五ぶし武士ぶしの鑑かみと稱たへけり々

二みち道みちの爲ために義ぎを忘わするゝ

乙とひくもゆかりの常磐御前ときはごせん

三やまと大和やまとに忍しのび居ゐたりしが

⑥ 老母は其爲囚れて

⑤ 嗚呼孝ならんとせば

慈ならず

⑥ 寧ろ孝道の爲自首せんと

④ 斯くて常磐は舊主なる

③ 妾幼兒の愛にまよひ

⑤ 自から故に罪もなき

⑤ 遙々まかり上りて候

③ 母の憂若を救ひ給はれと

いと哀れに聞えけり

⑤ 厳しき折檻うくと聞き

⑤ 慈ならんとせば孝ならず

⑤ 三兒を携へ出でにけり

④ 九條の女院にまみえ申上げるは

③ 今迄ある邊陲に隠れしも

⑥ 老母の憂目を悲しみて

③ 我等親子を六波羅に送り

誠を籠めし言葉の色

④ されば女院を始め女官等も

④ 常磐の孝道に感激し

⑦ 出して遣るも遣らるゝも

馴れし古巢も見納めと

後見送りて入りかぬる

③ 小歌は更に見えざりき

③ 今若乙若に打向ひ

⑥ いつかは捜し出されて

③ 去に由て今より名乗出んとす

⑤ 未練の舉動し給ふなと

③ 衣裳を調へ清車に載せ

⑤ 共に涙にくれ羽鳥

③ 打ふり返り眺むれば

人も情の村時雨

④ 常磐は漸く涙を納め

⑤ 御身達は所詮逃れぬ平家の敵

③ 亡はれんは定の事

⑦ 幼少年らも大將の兒なれば

③ 言はれて二人は聲揃へ

- ⑤ 美事切腹て見せ申さんと
- ⑦ 流石源氏の後胤なりと
- ③ 辛き涙を押し匿し
- ③ 母もともく死出三途
- ③ 知死期待つ間ぞ悼しき
- 廻りてはやき六波羅の
- ④ 取次役伊勢守景綱に對ひ
- ④ 老母を囚へ行方問させ  
給ふよし々
- ⑤ 自から見迄参りたりと  
訴へける々
- ④ 憶する色も見えざれば
- ⑤ 思へば又も湧き返る
- ③ 能くも申して給はりしよな
- 旭 ⑤ 渡るも今日か飛鳥川
- 憂しや浮世は小車の
- 館に車とめさせて
- ④ 妾幼兒を具して遁れしに
- ⑦ 今日其兒を携へて
- ④ 清盛臆て親子を引き見るに

- ④ 常磐は今若乙若を左右  
に座せしめ
- ③ いとしとやかに申しけるは
- ⑤ 願くは疾く御宥し給はりて
- ④ 但し一つの御願には
- ③ 和子等を後に殺して給へ
- ⑥ 他生の縁とさくものを
- ③ 深き先縁のあるならん
- ② 皆妾が浅慮にて
- ⑤ 推量してや人々と
- ③ 牛若を懐中にいだき
- ⑥ 老母は何の罪もなし
- ④ 我等親子を御成敗なし給はれよ
- ④ 何卒妾を先にして
- ⑦ 一樹の蔭一河の流れ
- ⑤ 況して親となり子となりしは
- ③ 卑怯ながらも隠れしは
- ⑤ 子故に迷ふ夜の鶴
- ⑥ こらへし涙せきあへず

六 咽び伏したるしをらしさは

色まさりたる氣色かな々

四 泣てよく申させ給へやと

六 母上我は泣き候はずと

六 押へていへるいぢらしさよ

六 また言ふすべもなかりしが

四 白洲に立てる白鷺も

木石ならぬ浮世の人

六 席にも得堪へずひそくと

春 常磐の松も一しほの

四 今若母を見上げつゝ

五 いふ傍らより乙若も

五 涙充溢湛ふる眼を

七 常磐はますく咽せ返り

五 情の波の打ち寄せし

夏 上見ぬ鷺の清盛も

いかで涙のなかるべき

四 すべりていつか影もなし々

四 名のみは清き清盛も

六 老母も稚兒も其人も

思はぬ方に指す船も

またも輝く白旗の

五 折られて折れぬ葉なり

開 松の廊下

一 さても元祿十四年

三 時の將軍綱吉公

四 終に常磐の色香にめて

四 許す事とはなりにけり々

捨てて操のたちまちに

三 基をこゝに開きしは

三 折られて折れぬ葉なり 止メ

一 三月四日の東雲に

三 勅答あらん賀日とて

- ④大名小名ことごとく
- ⑥中にも淺野内匠頭長矩は
- ④他人に先んじ種々に
- ④爰に吉良上野介義央は
- ④等しく未明に出仕なし
- ④人もなげなる舉動に
- ⑦やがて勅使の登營に
- ④人もなげなる舉動に
- ④驕る様こそ奇怪なれ
- ⑥間もあるまじき空の色
- ④威儀を正して諸大名
- ④輝き渡る星かとも
- ④柳營さして登城あり
- ⑤勅使もてなしの役なれば
- ④心を碎き居たりけり
- ⑤式作法の師範とて
- ④差圖に親疎の偏頗あり

夏  
夜はほのぐと明そめて  
袖を連ねて居流れしは

春  
威儀を正して諸大名  
輝き渡る星かとも

- 見ゆる許りの晴の場
- ④此時内匠頭は玄關にて
- ⑦勅使御迎への其砌
- ⑤但し御箱段にて可然や
- ④いとしとやかに問れしに
- ④今に於てこれ程のこと
- ④貴公の如き不束者
- ③皆寛大の御治世よと
- ④尻眼にかけて入りにけり
- ⑥いととも光榮ある氣色なり
- ④上野の介に出會ひければ
- ⑥石垣のもと迄進むべきか
- ④御教示仰ぎ候と
- ④吉良は傲然聲荒く
- ④さくは粗忽の至りなり
- ④よくも役儀の勤まるも
- ⑥衆人中に嘲けりつ
- ④左右に控へし旗本衆

- ④ 餘りの過言に手に汗握り
- ⑤ 浅野内匠頭長矩は
- ⑤ 一時にカツと憤怒を發し
- ⑤ 狂ふが如く追ひ絶る
- ⑤ 此程よりの汝が無禮
- ③ 覺悟をせよと喚きつゝ
- ⑤ 眉間に發石と斬付たり
- ⑤ 衿首丁と薙ぎ拂へば
- ④ 今一太刀と振り翳す
- ④ 伏目になりて居たりしが
- ⑤ 今の雜言日頃の無念
- ⑦ 兩眼血走り獅子奮迅
- ⑥ 上野介しばらく待て
- ④ 最早堪忍なりがたし
- ③ 小刀を抜き放ち
- ⑥ 斫られて遁る上野の
- ② 吉良は前にぞ打倒さるゝ
- ④ 内匠頭の背後より

- ④ 梶川與三兵衛走り寄り
- ④ 内匠頭は聲ふりわけ
- ⑤ 放ち給へと悶躁けども
- ⑤ 無念く悲しみつゝ
- ③ 心の中や如何ならん
- ④ 嗚呼内匠頭一朝の怒により
- ③ 大事を終に過されり
- ⑤ 實にや名に負ふ大石の
- ④ 亡君の怨敵を鳥が啼く
- ④ 兩手を抱へ組みとめたり
- ⑤ 武士の情に候ぞ
- ⑤ 梶川遂に放たざれば
- ③ 怨をのみて囚はれし
- ⑤ 思ひ遣るだに哀れなり
- ④ 身をも家をも打ち忘れ
- ⑦ されど重き遺命を含みてし
- ⑤ 盡す忠義に時を得て
- ④ 吾妻に名高き高輪や

③ 泉岳寺の苔の下

④ 美名を千古に傳へけり止メ

⑤ 美名を千古に留めけり

開 太田道灌

① 抑々太田道灌と申しけるは

② 資性豪毅勇敢にして

乙 少壯の時武に勵み

③ 文に疎くおはせしも

④ 築城の道に委しければ

④ 長祿元年武藏の國

⑤ 千代田寶田の地を相し

⑤ 江戸城をぞ築かれける

⑥ 今ぞ畏き大宮の

⑥ 雲井の庭と仰がれて

① 最譽ある業になん々

① 時しも頃は春の末

② 城の營をはりければ

② 勇む駿馬に跨がりつ

③ 士卒引つれ道灌は

③ 鷹野にこそは出にけれ々

④ 指して行方は白雲と

④ まがふばかりの櫻田や

⑤ さほへる駒の心すら

⑤ 棚引かれぬる霞が關々

⑥ 月毛の色も臍にて

⑥ 蹄に匂ふ若草の

⑦ 萌ゆる巷の春風に々

⑦ 煙る柳のいとまなく

⑧ 靡く緑のみだれ髪

⑧ いふすべもなき眺め哉

⑨ 葦たんばば薫る野に

⑨ 心も空になく雲雀



秋  
影は何處にをちこちの

たつきも知らぬ原中に

一人さまよひ居たりけり

折しも起る雨雲に

四 心せかれて道灌は

四 一むら茂る森をめざし

四 駒を早めて進みしが

四 早や降りかゝる春雨は

四 花を惜みしみやびをの

一 瀧ぐ涙としられけり

三 漸く森に近づけば

四 たれ松風に琴の音も

四 通ふしらべの床しさに

四 駒のあがきを緩めつゝ

四 聲をしをりに道灌は

四 頼む蔭とて賤が家の

三 門邊に駒を立てさせて

六 如何に此家の内に物申さん

五 今日この邊りの狩くらに

四 雨具の用意もあらざれば

四 しとどに濡れて候ひぬ

三 哀れ一領の蓑を貸し給へと

三 聲爽かに申しけり

六 たのもふ人に驚かされ

五 琴をかいやり静々と

四 衣紋つくるひ出で來しは

山越 鄙に稀なる手弱女の

年はいざよひ玉の面々

何れ由緒ある姫百合の

草葉がくれに世を忍ぶ

氣色は色に見えにけり

四 然れば道灌目禮して

四 今しも申し候ごとく

四 蓑をば貸して給はれと

六 二度三度いひけれど

五 答は絶えて口なしの

① 露もあふれん微笑を

③ たゞへて匂ふ山吹の

② 一枝折りて捧げつゝ

④ 面はゆげにも差出せば

③ 道灌其意を悟り得ず

⑥ 訝かしながら鶯の

④ 笠に縫ふてふ梅の花

② それならなくに山吹を

③ かざして遂に歸りけり

コ アンアメチツイテバウシチダノク  
孤鞍衝雨叩茅茨

セウヂヨメニオケルハナイツシ  
少女爲贈花一枝

セウヂヨハイハズハチハカダラズ  
少女不言花不語

エイユウシンチヨミダレイトノゴトシ  
英雄心緒亂如絲

④ さる程に太田道灌は

④ 近侍に出逢ひ仰けるは

③ 吾今蓑を借らばやと

③ 賤が家に立よりしに

④ 其家の少女山吹を

④ 吾に與へて物いはず

③ 如何なる意のあるやらん

③ 解きて聞せよとありければ

④ そは畏れ多き事なれ共

④ 抑々是は

なへやへはな  
七重八重花は咲ども山吹の

みのひとつだになきぞ悲しき

③ 斯くいふ古歌の意をとりて

③ 蓑一つだになきよしを

④ 花によそへて答へしなり

③ 言はれて道灌大に嗟嘆し

⑥ いて是よりは山狩をやめ

④ 和歌詩文を學ばんと

③ いと愧らひていはれしが

③ 遂に詩歌に秀でけり

秋  
人は心こころによる浪なみの

鳴く音ねぞ今いまも残のこるらめ々

一ひ二い三う四みいつまでも

三 今日九重ここのへに匂にほふめり

五 黄金こがねの色いろとなりにけり

春  
遠とほくなるみの濱千鳥はまぢどり

君きみがまましし、狩衣かりぎぬは

昔むかし七重しちへか八重山吹やへやまぶき

三 是これ言ことの葉はに咲さく花はなの々

三 黄金こがねの色いろとなりにけり止とメ

開 三 川 中 島

三 天文廿三年秋八月てんぶん ねんあき ぐわつ

四 上杉入道謙信うへすぎにふだうけんしんは

三 越後の國春日山の城主えちご くにかすが やま じやうしゅ

四 八千餘騎を引率せんよき いんそつし

六 川中島かはなかじまに出陣しゅつちんあり々

五 加賀越前かが えちぜんの奴輩やつばらは

四 これを屠ほふりて其儘そのまに

三 覇はを中原ちゅうげんにたてんとは

四 彼の村上むらかみが餘儀よぎなき頼たのみ

三 心こころならずも信玄しんげんと

四 人生朝露じんせい ちやうろうの身みを以もつて

四 いと口惜くちをしき次第しだいなり々

五 敵てきの旗本はたもと斬きくづし

六 其時謙信そのときけんしん申まをさるゝに

四 我父上わがちちうへの仇あだなれば

三 旗はたを都みやこへ押し立たて、

三 かねての願ねがひなりしかど

四 武士ぶしの面目めんぼくもだしかね

三 互たひに鉄てつみがきつ、

六 四郡しごんの土地とちを争あそふは

六 されば此度このたびの合戦かっせんには

四 一騎いきうちして兎とも角かくも

④ 有無の勝負を決せんと

⑦ 隊伍整々旗鼓堂々

⑤ 其武者おしの勇ましき

③ 目に狐狸のをどるを許さず

⑥ 百獸腦破裂すとかや々

漏るゝ朝日の影さして

散り行くあとを見渡せば々

④ 眞黒々の圓陣は

⑤ 進むが如く退く如く

⑤ もみにもんでぞ進まるゝ々

⑥ 威風四邊をはらひたる

③ 猛虎深山を行くところ

④ 獅子月明に吼ゆるとき

⑦ はや東雲の雲の間を

四方の河霧河風に

④ 旗さしものを押立てゝ

④ 必死を期せし越後勢

⑤ 廻り廻れるかけひきは

④ これ謙信が極意なる

④ スハ由断すな破られな々

④ 罵しり騒ぐ武田勢

⑤ 色めき立つて見えにけり々

④ もりかへさんも難儀なり

③ 一先勢を揃へんと

⑤ 川岸近く寄りしころ

青の駿馬に黄の羽織

此方を目蒐けて馳せ来るは

⑥ 車懸の軍法ぞ

④ 我旗本をかためよと

⑤ 二萬と聞えし大軍も

④ 浮足立ちし兵なれば

③ 此犀川の彼方にて

⑤ 天晴武功の信玄が

④ 遙に見ゆる武者一騎

白き頭巾を被りつゝ

④ 敵か味方か何者と

- ④ いぶかりあへる一刹那
- ⑤ 馬は疾風か電光か
- ④ 防ぐ兵士を斬り立て蹴立て
- ④ 利到したる有様は
- ④ 只獅子王が暴れいで
- ④ 群る羊を打つ如く
- ④ 面を向けん人もなし
- ⑦ 勢ひ込だる謙信は
- ⑦ 早や眼前に迫れども
- ⑤ 老巧無雙の信玄は
- ④ 稲葉の末に吹く風の
- ④ 夏 ぞよとも動かぬ大磐石
- ⑦ 池の真茹やあやめ草
- 〰 何れをそれと分けかぬる
- 〰 落着拂つて居たりけり
- 〰 同じ姿の七人武者
- ⑥ 武者振り見事や武田殿
- ⑦ 氣早の謙信これを見て

- ⑥ 越後鍛への拳のさえ
- ④ いざまゐるぞと大音聲
- ③ 三尺二寸の長光を
- ③ 大上段にふりかぶり
- ④ 驀地にぞ斫りかゝる
- ③ 陽炎稻妻摩利支天
- ⑤ さしも鋭き太刀風を
- ⑤ 軍扇上げてぞ受け留る
- ③ 受けし軍扇折り折りて
- ③ 疊みかけたる二の太刀は
- ③ 左の肩先ハツシときる
- ④ 續いて挙げし三の太刀
- ④ かさにかゝつて睨み下げ
- ⑤ 獅子吼の聲も凄じく
- ④ 什麼生か是れ什麼生
- ④ 答へに毛筋の隙あらば
- ⑥ 八幡座より空竹割
- ⑥ ゆめ許るさじと問ひかけたり

③ 聲に應じて嚴かに

④ 紅爐上一片の雪

④ 微に笑みを含みしを

莞爾と笑つて詞なく

③ 北を指してぞ走りける

④ 去るにも追はん人もなし

⑤ 縦横自在に駈け廻る

⑥ 敵も味方も目を見張り

④ 手に汗握る許りなり

⑥ 根太き聲は響きけり

④ 答へし人の唇るは

④ 心憎くや思ひけん

駒引返し只一騎

③ 來るに止むる者もなく

⑤ 千軍萬馬の其中を

⑦ 傍若無人の振舞に

⑤ あれよくと打目守り

④ 遺恨十年磨きにし

開 一 乃 木 將 軍

① 至誠は民の範となり

① 陸軍大將乃木希典が

① 世に壯烈の極みなれ

武道の花とたゞへられ

③ いとかんばしき俠骨の

③ 譽れを流し給ひけり 止メ

劔の下に大敵を

秋 打ち洩せ共後の世に

千隈の川の水長く

⑤ 譽れを流し給ひけり

① 道義は國の表となる 金土

① 君に殉ぜし最期こそ

⑥ 金州城外馬とめて

⑤ 斜陽に立つと詠じけん金

④ 老將軍の傍も

③ 今は果敢なく消果て

① 松吹く風の蕭颯と水

⑤ 千草の蔭にすだく蟲

③ 聲さへいとど哀れなり

⑦ 明治十年の戦に

⑥ 軍旗を敵に奪はれて

⑤ すでに一死を誓ひしが

③ 死處を得ざれば本意なくも

③ 徒し月日を送りけん

④ 日清日露の兩役に

⑤ 露營の夢を重ぬれど

⑥ 馬革に屍包むてふ

⑤ 機こそ遂になかりしか

③ わけて旅順の戦に

④ 難攻不落と誇りてし

⑤ 敵の堅城陥れ

④ 爾靈の山と其勳功

③ 外國までも響けども

② 萬骨枯れし責ひきて

⑤ 亡き兒を歎く様ぞなき

③ 花にも優る床し香は

④ 千代に秀でてかをるらん

皇師百萬征驕虜

野戦攻城屍作山

愧我何顔看父老

凱歌今日幾人還 十八番下

⑦ さはれ黄金も玉も何かせん

⑥ 誠の寶は子なるぞと

古人も歌ひしを

花の公達二人まで

先だてたりし將軍の

心の中や如何ならん

④ 先帝崩御まし、時

③ 英姿悲哀に包まれて

③ 帝を慕ふ切なさを

⑤ 生きて君寵極まりぬ

④ 永遠の行幸に出でましの

⑦ 遺書を委しく認めつゝ、地水

② 夫人静子をよびよせて

⑤ 流石に武士の妻なれや

① 心づくしを人やしるゝ

旭上 諒闇の空月はほそく

悲愁の聲も自から

③ 神靈の前にひれ伏してゝ

④ 今は甲斐なき此命 金々

③ 君に殉ひまつらんと 水地天

⑤ 維時轎車の出でます日

② 心の中を明しゝが 三番

⑥ 衣に秘めし其涙

甲頃は長月十三日

② 胸おどろかす秋風の

民の心に通ふ哉

甲折しも轟く火砲の音

⑤ 將軍かたちを改めて

④ うつし世を神さりましゝ大君の

みあとしたひて我はゆくなり 十三號

⑦ 遠近寺の鐘の聲

④ 玉散る劍ぬき放ち

⑤ 返す刃に喉笛を

⑦ 夫人は最期を見届けて

③ いとし我子も待つらんと

轎車發引としられたり

⑥ 大内山をふしをがみ 金々

④

十三號

⑤ さゝも終らぬ其暇に 金々

④ 腹一文字にかき切つて

⑤ 断つてぞ前に伏しにける十六號下

⑤ 妾も後れど御供せん 土々

③ 用意の懐劍取出だし 五番下



③ いでましてかへります日ひのなしときく

今日の行幸ゆきに逢ふあぞかなしき 十四番下

④ 一首しゆの和歌うたをかたみとて ④ 心亂こころださず見みん事ことに 水

⑤ 自害じがいをなして果はてにけり ⑥ 見みずや勇士ゆうしの其その最期さいご 土

③ 見みずや烈婦れつぷの其その今際いまは ⑤ 尊たふとちき血潮ちしほに濁にごり行ゆく 地

よの人心ひとこころすゝがばや 旭照あさひてり添そふ秋あきの霜しも

是これ日本ひのもとの精氣せいきなり ③ 一家かこぞりて君きみの爲ため

生命いのちを捧さげまつりにし 忠勇義烈ちゆうゆうぎれつの輝かがやきは

⑤ 建武けんぶの昔楠公むかしなんこうの ③ それと光ひかりを争あひて 水々

⑤ 譽ほまれは代々よよに残のこるらん 土 ③ 譽ほまれは代々よよに残のこるらん 止メ

開 玉藻の前

① 翠柳すゐりゆう靡なびけば櫻花あうくわち散ちる ① 彌生やひな央なの頃ころなれば 火

② 素性そせい法師はふしが詠えいじけん ③ 都みやこぞ春はるの錦にしきなる 三番

④ 茲こゝに坂部さかべの行綱ゆきつなとて ④ 北面ほくめんの武士ぶしありけるが 金土

③ 清水きよみづ詣まうでの歸かへるさに ③ 奇くしき捨子すてこ拾ひろひけり 五番

⑥ 一人ひとりの子こだにあらぬ身みの ⑥ 名なをば藻みくづと名なづけつゝ 金

⑤ いと懇ねんごに育そだてしが 一番下 ⑥ 天與てんよの麗質れいしつたぐひなく

六 譬へば春を待ち得たる

三 匂ひ床しき梅の花土

三 月に村雲花に風

二 譬に洩れて程もなく水

五 杖柱とも頼みつる

五 父母諸共世を去れば地

今は便りもあら蓑の

雨にさるゝや蓑蟲の

ちよよと鳴きて母もなし

時鳥四 嘆の八千度百千度

四 繰返せど詮もなや

七 哀れ藻や十七歳 地水

雨を含める海棠か

風に亂るゝ青柳か

又孤兒となり果てぬ 村千鳥

四 さはれ容顔美麗にして

四 詩歌管絃の才迄も

四 人に優れてありしかば 四番

六 時の帝に召し出され

五 大宮仕へをなしけるが土

三 才色愈々稀にして

四 君の寵遇限りなし 十二番

六 頃は鳥羽天皇の元永三年

五 紅葉散り行く秋の末土

三 高陽殿の御一間

三 晝を歎く銀燭に

五 月卿雲客いかめしく

四 綺羅星の如く列び居つ 四番

四 これぞ皇子の御降誕

四 祝の御宴と知られける 六番

七 月未遅き宵空に水

六 雲のけしきもたゞならず水

五 うち時雨てぞ吹く風に金々

四 御殿の灯はためきて

三 ハタと一時に消え去れば水々 六 黒白も分かぬ眞の闇 十七

- ⑤ 雲の上人立ち騒ぎ
- ④ あら訝しや不思議やな
- ④ 赫耀たる光を放ち
- ③ 主上叡感斜ならず
- ⑤ 玉藻前とぞ申しける 十一號
- ⑥ 主上の御惱募らせられ
- ④ 近侍の人々打驚さ 八番
- ④ 安倍泰親に計りけり 七番
- ④ 玉藻の前こそ奇怪なれと
- ⑤ 松明疾々とすゝむれば 十九
- ④ 妙なる藻の五體より 水々
- ④ 偏に月の如くなり 十四番
- ④ 玉の一字を賜りて
- ⑥ かゝる異變のありしより
- ⑤ いとゞ重らせ給ふより 金々
- ⑤ 時の陰陽博士なる 三
- ⑥ 泰親卜して思ふ様 金々
- ④ 肝膽碎く祈りごと

- ⑥ 墓目の修法に怖れけん 水々
- ⑥ 美しかりし其姿
- ⑥ 忽ち變じて妖狐となり 七丁
- ③ 憤怒の形相もの凄く
- ③ 烈風豪雨呼び起せば 地々
- ⑥ 一天忽ち搔き曇り 吟
- ⑦ 霹靂一聲百千雷 五丁
- ⑦ どよめき渡るや轟々と
- ⑥ 雨鬼倦めば風神叱す 十二丁
- ⑤ 物凄じき其有様
- ⑤ 天柱爲に摧かれて 水々
- ⑤ 地軸も割けん許りなり
- ⑤ 修羅の巻も今こそと 水々
- ⑤ 人々生きたる心地なく
- ⑤ 右往左往に逃げまどふ 七丁下
- ⑤ 獅子奮進の彼の妖狐
- ⑤ 當る者共蹴散らして 大打
- ⑤ 縦横無盡に荒れ狂ひ

草莽荆棘地に委して

琵琶の高音に響くらん 止メ

昔傳ふる幾千代を

⑤ ひらりと許り雲に乗り 地々 ⑤ 遙彼方に遁れ行く 八丁

⑤ 驚破こそ妖怪變化よと 四丁 ⑤ 泰親矢庭に幣おつとつて

⑤ 妖狐目がけて擲うてば 水々 ④ 大空遠く追ひ行けり 五丁

④ 傳へ云ふ ④ 那須野が原に逃げしてふ

⑤ 金毛九尾の彼の妖狐 二丁下 ⑤ 國傾けん巧らみも

④ 安倍泰親に看破られ ④ 三浦上總の兩介に

討たれて石と化りにしが 怨靈盡させず仇せしを

⑤ 天高うして地廣く 執心消えて解脱せり 金土丁下

⑤ 天高うして地廣く 那須野が原は今もなほ

開 二 千 手 前

豊田旭穰作譜

一 行く水の淵瀬に變る習ひとて 二 茲西八條の館なる

一 主相國清盛が 二 榮華の夢も陽炎の土

一 入日の草に消え行けば 二 名残をしくも一門は

一 都をすてゝ落ちて行く 大 一 六 わな痛ましや重衡卿

一 身はこれ三位中將の 二 其古へは雲のうへ

一 かけても知らぬ行方をば 二 五月の夜すがら聲たてゝ

一 鳴くや牡鹿の津の國の 二 生田の森の戦ひに

一 武運拙く生擒られ

一 心の外の都入り

一 思ひ遣るだに哀れなり 不如婦 二 此處は何處ぞ八橋の

一 雲井の都いつかまた

一 三河の國や遠江

一 濱名の湖に漁する

一 蚕をし見れば追にも

一 御法の船ぞたのまるゝ

一 箱根足柄はるゝと

一 大磯小磯を見渡せば

一 藻汐の煙松の風

一 いづれ憂身の習として

一 今は涙に曇るらん

一 身は朝敵の剩さへ

一 南都炎上の科あれば

一 程もあらせず玉の緒の

一 絶ゆるは明ら星月夜

④ 鎌倉山にぞ入りにける々

④ 急がぬ旅と思へども

④ 憂き節しげき事なれば

③ 花の顔月の眉

⑤ いとど曇りて見ゆるかな々

④ 頼朝哀れと思ひけん

④ 狩野介宗茂に

④ 暫時が間とて預けられ

③ 公が侍女なる千手をば

③ 旭 勞り申せと遣はさる々

⑦ 時しも夏のはじめつかた

雨蕭々の夕空に

徒然慰めまつらんと

情も深き盃に

④ 宗茂酒をすゝむれば

④ 頼朝公の御説とて

② 千手は琵琶こそ參らすれ十九號④ 手越の長者が娘なる

千手は容姿麗しく

② 心ざまさへ優しきが

⑤ 楚囚の君をいとほしみ

⑥ 朗詠謠ふ數々に

④ 重衡卿も琵琶とりて

③ 少時が程を弾き給ふ 初段二段

⑦ 哀れや君が調べし四緒の

⑤ 撥の捌きは輕けれど

捌きかねたる胸の中

琵琶もや重く思ふらん 村チドリ

燭闇數行虞氏涙

夜深四面梵歌聲

④ 斯く唄ひつる重衡も

③ 實に淺猿しや昨日まで

⑥ 都の花と榮えしを

⑤ 今日東の空に來て

③ 忍ぶに堪へぬ雨の音

しをるゝ袖の色見ても

④ 移れば變る世の中や シギ下

③ 一樹の蔭に宿り合ひ

⑤ 同じ流を結ぶだに

③ みなこれ他生の縁ぞと々

④ 千手が謠ひし其心

④ 如何にきくらん東人

④ かくて盃かさぬれば

④ 更け行く夜年の時鳥

④ 語りも果てずうたゝ寝の

④ 夢も結ばて東雲の

⑦ 明くるに早やき夏の夜の

⑤ 短き契も今はとて

③ 勅詔なれば詮方も

② 泪の露の袖と袖

③ 其後朝ぞいたましき 十五號下

④ 青丹吉奈良都の夕嵐

③ 可惜盛を散る牡丹 イソチドリ

⑦ 哀れ一夕遭逢の

⑥ 契を仇といふ勿れ 十五號

⑤ 見よや花の衣も今ははや

③ 君なき我に何せんと

④ 泪の雨のをやみなく

④ 嘆きに沈む人あるを

④ 信濃の國の善光寺 一丁下

③ やつれ姿も墨染に

④ 重衡卿が無き後を 水々

⑤ 弔ふ事ぞ有難き

③ 弔ふ事ぞ有がたき 止メ

開 源三位

豊田旭穰作譜

② 祇園精舎の鐘の聲

② 諸行無常を顯はして 火

一 飛花落葉は目のあたり

一 貴き人も時得ずば

二 終に亡ぶる習ひあり 太一

六 時しも頃は治承四年

三 袖うち濕る五月の空

四 晴れぬ雲井も九重に

四 啼くや青葉の時鳥

四 聲高倉の以仁王 六ノ下

六 平家を討たん御心

五 早くも敵に洩れしかば 四番

四 源三位入道頼政は

四 宮を誘ひまゐらせて

一 族並に寺法師

三 二百餘騎を従へて

夏 三井寺さして落給ふ 一番

七 是れやこの行くも歸るも逢坂の

なほ行末は深草や

木幡の里をよそにして

伏見野澤田見え渡る

七 其の水上をたづねつゝ 磯止

旭 五 馴れし都をあとに見て

五 茲ぞ浮世の旅心

宇治の川橋うち渡り

心を浪に碎きつゝ

大和路さしてぞ急がるゝ 二 三

四 宮は先つ夜うちとけて

四 御寢召されぬ故やらん

三 寺と宇治との間にて

四 六度までも御落馬

三 いとゞ煩ひ給ふより 六ノ下

六 暫時は休め參らせんと

五 平等院に入れまつり

四 宇治橋三間引落し

四 敵の來るを待ちにけり 十二番

七 頼政其の日のいでたちは

六 薄墨染の直垂に



五 品革威の鎧着て

四 今日を最期と思ひけん

四 兜はわざとつけざりけり七番四やがて源氏平家の兵は

五 名に負ふ宇治の河岸を 五 距て、軍を備へつゝ、水地

五 哄とあぐるや関の聲 五 矢叫びの音折しもを

夏 夏の河霧立ちこむる 曉瀬々の白波に

たぐへてこそは凄じけれ、 四 爰に宮方の寺法師

四 筒井淨妙一來法師とて 水地 六 自門他宗に許されし

五 悪僧輩のありけるが 二番 四 八寸ばかりの橋桁を

五 飛鳥の如く渡りつゝ、水々 五 荒るゝ河浪事ともせず

五 飛來る征矢ものかはと水地 六 敵のたまりに躍り入り

五 矢庭に數十騎斬て落す 十三丁 七 大膽不敵のふるまひに

六 敵も味方も氣を吞まれ 五 目を驚かす計りなり、

四 玆に又平家方に 四 下野の住人足利又太郎忠綱とて

四 生年僅かに十七歳 一丁下 六 緋威の鎧に白星の

五 兜猪頭に被りて 水 五 大中黒の廿四さしたる矢を

五 頭高に負ひ 金 四 重藤の弓おつとりもち 四番

四 紅の幌かけて 四 連錢韋毛の馬の太く逞しきに

五 金覆輪の鞍おきて 四 乗つたりけるが 二番

④ さばかり難所の大河とて

⑤ 流石味方の軍勢も

⑤ 渡りかねてぞ見えけるを

⑤ 言ひ甲斐なしとや思ひけん  
二丁下

⑥ 鎧ふんばり高らかに

⑤ 宇治川の先陣我れなりと 水々

⑤ 名乗もあへず手勢三百騎

④ 轡揃へ激流に  
春

⑥ サツと乗り入る有様は

翅並ぶる村鳥の

羽音もかくやと白波に

浮きつ沈みつ渡り行く 十丁

⑤ 忠綱大音聲に下知すらく 金々 ④ 大事の河ぞ過失すな

④ 水逆巻くは岩あるぞ 一丁下 ③ 弱き馬をば下手にならべ

③ 強きに水を防がせよ ③ 馬の足はづまば手綱を  
吳て泳がせよ 十一丁

④ 互に心を一つにせよと 地  
大落

⑥ 曳々聲を放ちつゝ

喚き叫んで一時に

④ 一騎も残さず打渡る 火車

⑦ これに續いて平家のもの共

⑥ 打入れく乗り渡せば

⑥ 宮方なでふたまるべき金

④ 半丁計り引退き

④ こゝを先途と戦へど 二番

④ 衆寡敵せず追々に

③ 白旗しどろに打見えつ

⑤ 剩へ頼政が股肱とたみてし

源 三 位

- ③ 仲綱兼綱兄弟も
- ④ 今は何をか期す可きと十一ノ下
- ④ 最早限りと覺ゆるぞ
- ③ 心に思ひ定めしが 二號
- ⑥ これこそ三位入道の
- ③ 取渡されて口々に
- ③ 恥辱これに過ぎざれば 金々
- ② こと迄退きまゐりたり十五ノ下
- ③ 唱は涙に眼もくれて 十四號
- ③ 茲に最期を遂げしかば
- ④ 郎黨渡邊唱を召し 金々
- ④ 敵の中にて討死と
- ⑦ 老おとろへし首とられ 水地
- ⑤ 白髪之首よと敵軍に
- ③ 言ひはやされなば末代の
- ② 心静かにと存じつゝ
- ⑤ 年頃仕へし主の君を

源 三 位

- ③ いかて手づから討たるべき
  - ④ 御首たまひ候はんと
  - ③ いまは實にとや思ひけん八番
  - ⑤ 扇うちしく芝の上
  - ③ 埋木の花咲ときもなかりしに
  - ④ と辭世の歌を吟じつゝ
  - ⑦ 流るゝ水のあはれ世の
  - ⑥ 其理を汲みてしる
  - ④ せめて御自害召されかし
  - ③ 太刀さしやれば頼政も
  - ⑦ 平等院の庭の面
  - ③ 鎧ぬぎすて坐をくみて 廿ノ下
  - ⑤ 腹かき切つてぞはてにける
  - ⑥ 文武秀てし頼政が
- 身みのなる果はてぞ悲かなしかりける 九號
- こゝぞ名なに負おふ宇治うぢの里さと
- 文武秀ぶんぶひいてし頼政よりまさが

- ① 跡ぞ悲しき芝の露 一丁下
- ② 昔の夢をや結ぶらん 止メ
- ③ 昔の夢をや結ぶらん 止メ
- ④ 昔の夢をや結ぶらん 止メ
- ⑤ 昔の夢をや結ぶらん 止メ

開龍の口

豊田旭穰作譜

- ① 光明心の床の上々
- ② げにや妙なる法の場
- ③ 水の流れもおのづから
- ④ 此處は何處ぞ名にし負ふ
- ⑤ 濱の松風音たて
- ⑥ 一心三觀の月満てり 火
- ⑦ 身延の山は風の音 土
- ⑧ 諸法實相と響くらん 一番
- ⑨ さも恐ろしき龍の口
- ⑩ 岸かむ浪ぞ凄まじさ々

- ① 七さても日蓮上人は
- ② 鎌倉殿に獻ぜしが
- ③ 前の執權時頼の
- ④ 由比が濱邊に碎け散る
- ⑤ いとものはかなき限りなれ
- ⑥ 八年九月の十二日 水地
- ⑦ 草の庵をあとにして
- ⑧ 見渡せば浪漫々の海の上
- ⑨ 雨の方は安房上總
- ⑩ 立正安國の一策を
- ⑪ 忠言耳にさからへば 四番
- ⑫ 怒に觸れて御命
- ⑬ 水泡となりて消えんこそ
- ⑭ 時しも頃は文永の
- ⑮ 夕日も曇る松葉が谷
- ⑯ 今宵ぞ死出の旅衣 々
- ⑰ 遠目にそれとわかね共
- ⑱ 北は遙に峰つゞき 金々

⑤ 賤が茹干す稻村の

⑤ 真如の玉と輝やけど

⑤ 晴つ曇りつ定めなき

③ 路のほとりにさし出づる

うき御袖に拂ひつゝ

やがて馬にて着き給ふ 五號

⑥ 已に絶えなん玉の緒を

旭 身は悲しくも梓弓

よる邊渚にひれ伏して村千鳥

⑤ 岬にかゝる月影は 六ノ下

⑥ 秋の空とて村雲の

② 御身の上を感ずれば

松の下枝の露時雨

渚間近き刑場に

⑦ 大士の御姿見るにつけ

④ つなぐよしなき矢來の外天

引返さんもかた糸の

④ 幕へどつきぬ御名殘

③ 日朗はじめ御弟子等が火

① 妙法蓮華經と

⑤ 唱ふる聲も泪なり 五號

平の頼綱が下知らけて

③ 大士の後に立寄りしが

④ いかにも御僧

④ 出家の身にてましますを

③ 御命にまで及ぶこと

③ 此三郎も今は早や

② 南無妙法蓮華經

⑤ 由比が濱浪聲そへて

④ やがて時刻も移りしかば

太刀とり依智の三郎は

④ 何思ひけん小腰をかゝめ

④ 世にも稀なる大徳の

③ 他宗を誘り給ふより

③ 惜き限りに候はずや 八番

③ 五十路を越えし老の坂

- ④ いかにかに嚴命なればとて
- ⑤ 老さき短かき身を以て
- ⑥ 佛法弘通の大徳を
- ⑦ 及の錆となさんこと
- ⑧ 罪恐ろしう候なり 一號
- ⑨ 今日より御心改めて
- ⑩ 御題目をすてまさは
- ⑪ 知行にかへても御命
- ⑫ 必す救ひまつらんと
- ⑬ 誠をこめてぞ申しける 十五號
- ⑭ 大士は静に三郎を
- ⑮ かへりみ給ひ宣ふやう 二番
- ⑯ 法華の御爲一身を
- ⑰ すてんは日頃の願ひなり
- ⑱ 今は何をか歎く可き
- ⑲ とくく首を刎ねよとて
- ⑳ ゆりする給ふ大盤石
- ㉑ ゆるぐ氣色も見えざりけり 七號

- ① 三郎今は是非もなく
- ② えいと一聲もろともに
- ③ 一 天俄にかさくもり
- ④ 怒るや龍王浪を蹴り 火東
- ⑤ 沖より颯吹き立つれば
- ⑥ 百雷豪雨これに和し 水々
- ⑦ 立てつらねたる松明篝火も
- ⑧ ハツタと一時に消え去りぬ廿二丁
- ⑨ あなやと思ふ暇もなく
- ⑩ 虚空に火焰を吹き放つ 大打
- ⑪ ものくしやと依智三郎
- ⑫ 太刀とりなほし身を構へ
- ⑬ 丁とうてばこはいかに
- ⑭ 名劔三つに碎けとぶ 六丁
- ⑮ さても不思議や時しもあれ
- ⑯ 讀誦の御聲すみ渡り

⑤ 黒雲次第に立ちされば

夏 波白妙の和田の原

④ あな恐ろしと人々は

③ 詮すべもなく頼綱は

④ 急使の馬に鞭うたせ

⑦ 鎌倉にても終夜

⑤ 只事ならぬ不思議さに

④ 俄に下る嚴命に

③ 蹄に砂を蹴立てつゝ

⑥ 怪火忽ち消えうせて

空曉となりにけり カリ下

④ 生きたる心地なかりしが

④ 此由具に傳へんと

⑥ 鎌倉さしてぞ使しける 十二番

⑥ 御殿頻に鳴動す ホ々

⑤ 急ぎ大士を赦免せよと

④ 南條七郎馬をたて 一丁下

③ 刑場めざして急ぎ行く 廿三丁

⑦ 七里が濱の朝風や

⑤ 使者が心はせかれつゝ

春 川のはとりに行合ひぬ一番

水永へに濁りなく

由比が濱邊にうつ浪の

大士の徳こそ尊けれ

⑥ 怒りし波は静まれど

④ 上り下りも半して

⑦ 今も猶名に流れたる行合の

寂光 山龍口寺

絶ゆる時なく仰がるゝ 二十下

③ 大士の徳こそ尊けれ 止メ

筑前琵琶歌終

大正四年五月二十日印刷  
大正四年五月廿三日發行

(筑前琵琶歌集)

正價金參拾錢

不許複製

歌譜禁轉載

編者 琵琶新聞社

發行者 川越次郎  
東京市神田區小川町十六番地

印刷者 高橋郁  
東京市京橋區弓町二十五番地

三協印刷株式會社印行

發行所

東京市神田區小川町十六番地

川越書店

振替口座東京一七七七八番



# 筑前琵琶教授

東京市麴町區一番町三十二番地

旭正會

橘 旭 絃

橘 旭 櫻

電話番町二二三四番

## 川越書店既刊好評書類

永田錦心先生編並作譜

△音譜附獨吟自在也▽

### 彈法圖解獨吟琵琶歌集

彈法圖解並音譜附  
本文藍、赤、印刷  
正價金參拾錢  
郵送料金四錢

△好評嘖々第六版發賣▽

△攜帶至便袖珍美本▽

△本書は薩摩琵琶界の巨人永田錦心先生の秘曲琵琶歌、數拾曲を集む  
△歌は正調、點附せる音譜は正調にして初心者にも容易に獨吟する事  
を得べし

△琵琶の彈法は分類的に圖解を拾數頁に涉り丁寧に説き研究者には好  
資料なり

△本書は初心者及研究者並琵琶を好愛する人の優良の好師友也

■ 川越書店既刊好評書類 ■

胡春飯田亮先生編  
東京各名流大家先生譜

△音譜附獨吟自在也△

彈法琵琶歌新曲集

彈法圖解並音譜附  
菊判半載 全一冊  
正價金參拾錢  
郵送料金四錢

本書作譜者氏名(イロハ順)

- △伊集院鶴城氏
- △永田錦心氏
- △宮田秋堂氏
- △吉村岳城氏
- △牧野錦光氏
- 外大家諸氏

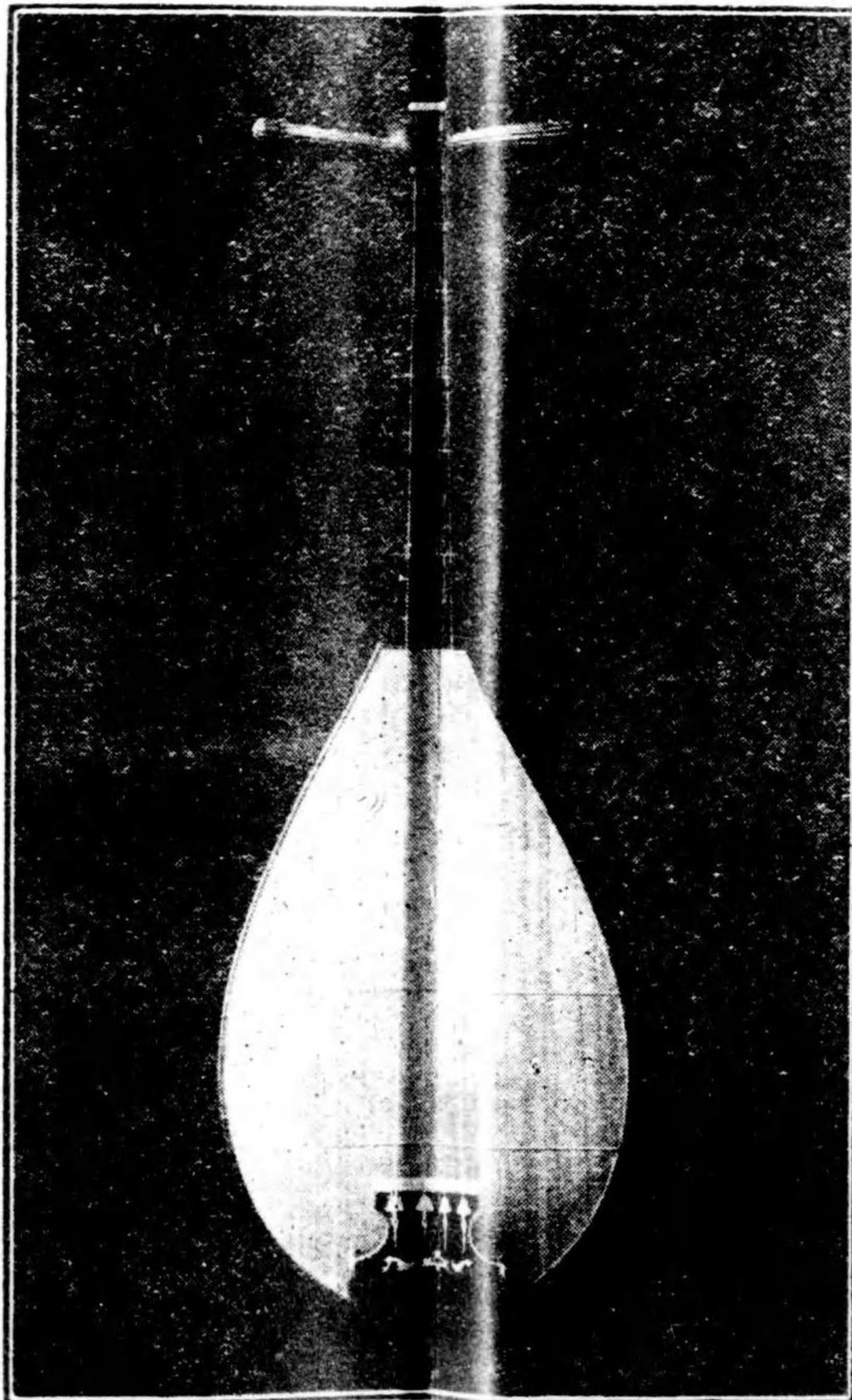
(本書特色)

彈法圖解は極めて親切に説き初心者にも容易に獨奏が出来る

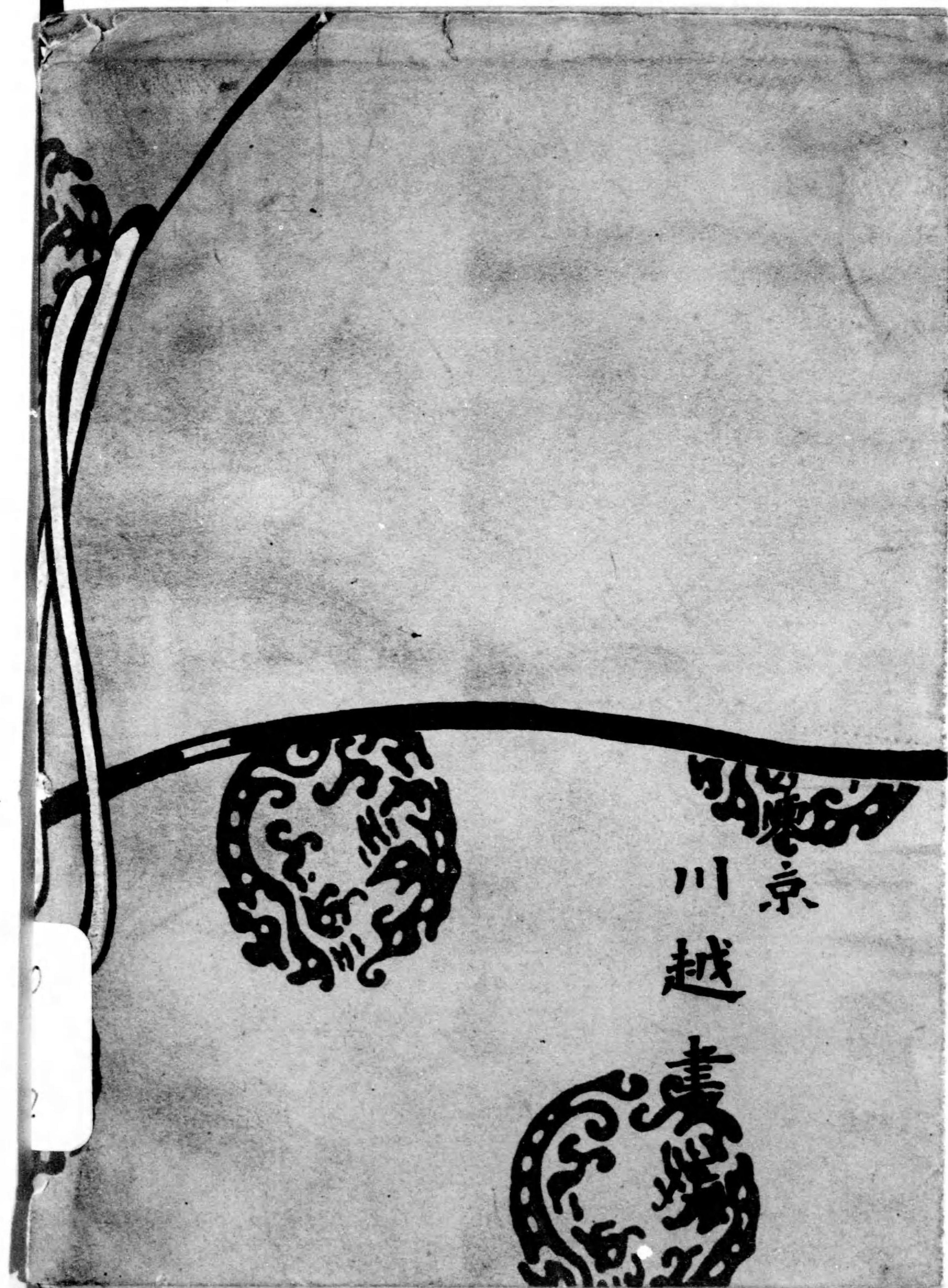
△歌曲は現今各琵琶大會に於て彈奏せられつゝある新作中特に妙曲のみ數拾番を撰び曲譜は現代の各大家諸氏の點附せられしものである  
△歌譜の正鵠は本書の特色である又誇りである

△初心者は勿論研究者及琵琶を愛する人には是非とも必要の書である

216  
200



終



京川

越

書